

# 目 次

2006年7月  
第148号

## 提言 ～今、学校に求められるもの～

『『思い』そして『形に』』

県教育センター所長 新井田 大…………… 1

## 特集 ～教育センターは 今～

「授業力向上のための校内研究の在り方」

教育調査研究チーム…………… 4  
学校評価研究チーム  
カリキュラム開発研究チーム  
情報化推進研究チーム

## 講座紹介

高等学校教務主任研修会から

『『学力向上のための授業づくり』～校内研修の在り方を考える～〕…………… 12

今日的諸問題の理解と対応講座1から

『『中間学級における校内適応支援の在り方』

～不登校児童生徒の教室復帰への援助指導～〕…………… 14

今日的諸問題の理解と対応講座2から

「軽度発達障がいの理解と対応」…………… 15

## 連載

学校組織活性化のための『実践プログラム』

『『学校経営・運営ビジョン』に基づく調査内容の見直しと調査紙づくり』

学校評価研究チーム…………… 16

授業改善

『『観』の見直し』

カリキュラム開発研究チーム…………… 18

教員ネットワーク

「ネットワークによる授業づくりの改善をめざす『教員ネットワーク』の構築をめざして」

情報化推進研究チーム…………… 20

情報教育講座

「平成18年度情報教育講座のご紹介」

情報教育チーム…………… 22

組織マネジメントの発想を生かした実践例

「新入生の導入期指導について～高等学校における活力のある生活のために～」

教科外教育チーム…………… 24

実践 学校教育相談

「機能していますか？ 校内の特別支援教育体制～特別支援教育コーディネーターの役割と活動～」

教育相談チーム…………… 26

教科研修講座

「自然の姿に迫る～理科研修講座～」

教科教育チーム…………… 30

## 教育実践

指導主事の個人研究から

…………… 32

長研だより「研究テーマ決定」

…………… 33

カリキュラムセンターだより「先生方のニーズに応えます！」

…………… 34

発信「情報モラルの授業を気軽に始めましょう！」

…………… 35

おしらせ「講義（講演）を聴講してみませんか！」

…………… 36

「実践に役立つ教育資料」

# 「思い」そして「形に」

県教育センター所長

新井田 大

## I 思いを形に

### 1 愛の句碑

五月下旬の日曜日、降り続く雨が木々の緑をいっそう鮮やかに引き立てる木立の中、飯舘村の村民の森「あいの沢」では、「愛の句碑」の除幕式が行われていました。俳人の黛まどかさんが選者となり、平成17年度に、国内外から応募があった三千五百余りの句の中から、「愛」を主題とした五十句が選ばれ、村内で産出する御影石に一句ずつ刻まれていました。「自己愛」が肥大化し、「他者に対する愛」が萎縮していく感が強く感じられる中であって、刻まれたそれぞれの句は、「大切なことを忘れてはいけない。」と、静かに訴えているようでした。

「愛の句碑」は、平成13年度から飯舘村で始めた「愛の俳句事業」の中心として位置付けられていたものです。事業は17年度で終了しましたが、この間、各年度五十句ずつ二百五十句が選ばれ、石に刻まれ、「あいの沢」の各所に配置されています。事業期間中の応募総数は、一万五千四百句にもなったと担当者は話をしていました。

当日行われた選者を囲む園遊会で、黛まどかさんが次のように話していたことが強く心に残っています。

「愛は漠然としていて形にするのが難しいも

のです。そして、なかなか相手に伝えにくいものですが、俳句にすると不思議と表せてしまう。それが俳句の魅力です。他者への愛が失われつつある今、この事業を通して愛の力を再発見し、これからも世界に向けて愛の輪を広げていただきたいと思います。また、俳句を創ることは、普段見逃している様々なことに関心をもつことでもあり、使うことばも洗練され、表現を通して思考力も高まっていくものです」。

入選句の中から、2句ご紹介します。

いくたびも 背きし父の 墓洗ふ

西内正浩

山の教師 つづけるという 冬帽子

横田芙美子

### 2 状況を敏感に感じ取る感性

この事業を推進したのは、現村長である菅野典雄氏でした。「お金のことだけでなく、地域で文化的な香りがする事業、日本中に、世界中に向けて、小さな村から発信できる事業を何かできないだろうか。」との思いがその根底に強くありました。

形ある物がどんどん増えていくことが、豊かさの象徴であった時代が長く続いていました。このような時代を経て、私たちは豊かさを享受できるようになりました。しかし、今、このような意味での豊かさだけでは満足できない人達も多くいます。菅野氏は、このことを日々

の村政の中で強く感じていたと話しています。

### 3 思いを語る

思いを実現するには、その思いを心を込めて、具体的に多くの人達に語りかけ、理解を得なければなりません。菅野氏は思いを形にするために、精力的に構想を練り上げました。辿り着いたのは、愛にこだわった「愛の村構想」でした。当初、「こんなことで飯が食えるのか。」「村長は何を考えているのか。」との批判が出されました。しかし、具体的に議論を続け詳細に構想を練り上げる段階になると、積極的で建設的な意見が多く出されるようになり、実現へ向けて見通しが出てきたことを実感していったそうです。

### 4 思いを形に

思いを形にしていく際にもっとも困難だったのは、「愛」という抽象的なことばを具体的な形あるものにする段階でした。過疎化が進み、一人暮らしをせざるを得ない老人や、進学・就職のために村を出て行かざるを得ない若者が多数いる状況下で、「家族愛とは」「家族の在り方とは」等々、様々なことを村長は考えました。そのような中で、「愛」をテーマにした俳句を全国から募集し、俳句を通して様々な愛を考える村づくりを具体化していきました。この時、「県の遊歩道50選」に選ばれた村内の豊かな自然を生かす、とりわけ村民の森「あいの沢」の「愛」を前面に押し出すことも強く意識していました。

### 5 既存の資源を生かす

村内では良質の御影石が産出し、石関連の産業が村の経済を支える基幹産業として大きな位置を占めています。しかし、近年外国から安価な石材が大量に輸入されるようになり、先行きに不透明な面が見られるようになって

きました。そのような中で、「御影石」をこの事業に利用できないかと考えました。募集した句を石に刻み長く残すことを考えたのです。それを、既にあった「福島の遊歩道50選」に選ばれていた「あいの沢」の池を廻る遊歩道と結び付け、周辺整備と句碑の効果的な配置へとつなげていきました。現在は、遊歩道散策の中で「愛の句碑」鑑賞ができるように全体整備がさらに進んでいます。

一つのアイデアが、既存のものと結び付き、既存のものが新たな光を放ち、新たな意味付けがされて有効に活用される。そして、地域づくりに大きな貢献をしている事実は、学校にも多くのことを教えているように感じています。

### 6 思いは人を動かす

「愛の俳句事業」で、愛をテーマとした俳句を募集することになり、次の課題は選者でした。村長は最初から、黛まどかさんをお願いすることに決めて、一面識もなかったにもかかわらず、ぜひ選者になって欲しいことを手紙で切々と訴え実現していきました。黛さんに思いが伝わり、「ぜひ、お手伝いをさせてください。」と一回で快諾していただいた時は、本当に嬉しかったと笑顔で話していました。

「真剣な思い」は人の心を動かします。真剣に取り組んでいるところには、応援団が自然に集まってくるものです。

池を巡る遊歩道の一角、池の水辺に、御影石に刻まれた黛まどかさんの句碑があります。そこには、

会いたくて 逢いたくて踏む 薄氷  
と刻まれていました。

### 7 事業の広がり与人の繋がり

「何をやりたいのか」の思いが明白であれ

ば、思いは実現するものです。計画段階や、事業を推進する中でできる、人と人とのつながりが相乗的に働き、当初考えていなかった新たな効果をもたらすことも多いのです。

現在、日本の多くの自治体は、生き残りをかけた取組みを必死に行っています。それぞれの首長さんは、地域への思いをアイデアを絞りながら具体的に実現しようと日夜努力しています。学校は、各自治体が真剣に取り組んでいるこのような姿から、学校改革の多くのヒントを得ることができるようだと思います。

## Ⅱ 俳句を教育に生かす

### 1 感性とことばと思考

飯舘村の「愛の俳句事業」を学校教育の視点で考えていくと、そこには多くの重要なことが見えてきます。その点について触れてみます。

俳句は、日本語の特性を生かしたことばの総合芸術です。専門家でない者がこのようなことを言うのは大変勇気のいることですが、そのように思います。五七五のもつリズム感、ことばが抵抗なく「すとん」と体に入ります。同時に強い説得力ももっています。

日本人は豊かな感性を持っている。それは、美しくも厳しい四季の変化と、その中で見られる自然の情景やほんのわずかな変化、人々の毎日の生活の中で垣間見られる小さな表情の変化から、感情の表出を敏感にとらえることができる特性を、長い時間をかけて磨いてきたことにより獲得されてきたのだと思っています。そして、それらを表現し伝えようと、多くの繊細なことばが生活の中から紡ぎ出されてきています。俳句は、「感性」と「ことば」

と表現のための「思考」が17文字に凝縮され、日本人に染みついたリズム感とうまくマッチした表現様式なのではないかと思います。

人はことばを使って考え、考えたことはことばを使って他人に伝えます。同時に、自分自身にもことばで自分の考えを伝えているのです。感じたことを他人や自分に伝えるのも、ことばを介して行われます。「感性」と「ことば」と「思考」は、互いに密接に関係し合っています。

### 2 俳句創りを教育に生かす

17文字で様々な思いや情景を表現するために研かれる「感性」と「ことば」に対する鋭い感覚、これらを五七五の器に盛り付けるために巡らす「思考」、これら「感性・ことば・思考」は、互いに高め合いながら一つの句を創っていきます。

歌舞伎役者の板東三津五郎さんも俳句が好きで創っているそうです。俳句を創り出してから、健康のために行っていた皇居周辺のジョギングの際に、「今まで見えていなかった美しい光景が見えて来た。」と話しています。17文字の器に、感性とことばを盛り付け、表現しようとする、今まで見えなかったものが見え出してくる。「愛」もその一つであったのだと思います。

17文字を用いて、日本人が長年親しんできた俳句を創る活動が、子どもの感性を高め、ことばを磨き、思考力を育み、現在多くの学校で実践されている読書活動と共に、「学力」や「心」の問題解決につながる具体的な一つの方法になりうるのではないのでしょうか。

「あいの沢」の「愛の句碑」を巡りながら、教育のあるべき姿について、「思い」そして「形に」を考えていました。

# 授業力向上のための校内研究の在り方

教育調査チーム 学校評価研究チーム  
カリキュラム開発研究チーム 情報化推進研究チーム

各学校の教育課題の解決を目的として進められている校内研究は、児童生徒の変容でその成果が示されます。現状としては、同一テーマを追究する共同研究が多く、中学校や一部の小学校では、それぞれが専門とする教科についてテーマを設定し、追究している事例が増えてきています。

ここでは、校内研究において、学校の課題を解決すること、児童生徒の変容を追究することに加えて、教員の授業力向上を求めることの必要性について示します。具体的には、校内研究の基本的な進め方を確認しながら、そこに教員一人一人がどのようにかわり、授業力を向上させていけばよいか、以下の項目に沿って考えていきます。

- (1) 今、なぜ校内研究の充実なのか
- (2) 課題を授業実践にどう結び付けるか
- (3) 仮説検証のための授業実践をどのように進めるか
- (4) 実践や調査資料によって、研究成果をどう検証するか
- (5) 研究のまとめをどのように行うか

## I 今、なぜ校内研究の充実なのか

児童生徒に、知識・技能に加え、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力を含む確かな学力を身に付けるには、教員の資質・能力の向上が必要です。そのためには、教員研修の充実、特に、全教員が参加する校内研究の充実を図ることが肝要です。

校内研究は、学校の教育目標具現に向けた児童生徒の学力向上、教員の授業力向上、教員の協働意識の高揚等に大きな役割を果たします。

さらに、次のような効果も期待できます。

- 学校の教育課題を具体的な研究課題として全教員で共有できる。
- 研究課題の解決を学校全体で行える。
- 研修の成果を児童生徒の指導に直接反映できる。

しかし、「校内研究は実施しているものの、なかなか全員での取組みにならない。研究のための研究になりがちである。」という実態がないわけではありません。

そこで、以下のような視点が大切となります。

## II 課題を授業実践にどう結び付けるか

校内研究の中で授業力を向上させるには、教員一人一人の研究テーマが共同研究テーマの追究に関連していることが必要です。つまり一人一人の教員が自らのテーマを磨き上げ、共同研究のテーマに関連付けて考えていくことが大切であるということになります。ここでは、共同研究テーマと個人研究テーマを関連付ける方法について示していきます。

### 1 教員のニーズを生かした研究課題の集約はどうすればよいのでしょうか。

- (1) 日常の教育実践の改善点の明確化

一人一人の教員が、日常の学級経営、生徒指導、学習指導等の問題点を明確にします。これまでの校内研究で残された課題を吟味し、問題点を一層深くとらえるようにすることが大切です。

そして、研究を推進する側では、個人としての研究課題、校内研究課題に対する要望、これからの教育の在り方という点で教員一人一人のニーズを明確にします。

(2) 学校の研究課題の集約

明確にされた問題点やニーズを生かして学校の研究課題をいくつかに集約します。集約するためには、次の手順で行うことが大切です。

- 研究課題を整理し、集約するための資料をつくる。
- 全体協議会で、いくつかの研究課題についての共通理解を図る。

**2 研究課題を生かして共通理解を図りながら研究テーマを設定するにはどうすればよいのでしょうか。**

(1) 研究課題の共通理解

前年度に残された研究課題の再確認、児童生徒・学校の実態、教員のニーズ、研究課題の順序性、共通理解の図りやすさ、研究問題の今日性等を考慮して話し合いを十分に深めることが大切です。

(2) 研究課題の限定

まず、共通理解に立って、必要性や重要性を比較検討して研究課題の重み付けを話し合います。次に、達成可能かを考慮して研究課題の順序性を見通します。そして、研究課題相互の関連を考え、分析統合して共通する部分を集約していきます。この際、研究課題を一つに限定するように努めます。

(3) 研究テーマの設定

自校の実態を考え、次の点から研究テーマを構想します。

- 到達の姿（目指す児童生徒像）
- 内容・方法
- 組織
- 期間 等

限定された研究課題の到達点を具体的にイメージします。そして、予想される課題に対処できる具体的な方策を想定し、研究主題を設定します。研究主題は、研究の意図が十分表現できるように、目的、内容、方法が分かるような表現にします。

研究主題の設定に、個人研究を関連付けているかという観点も大切なことです。

**3 研究意欲を促す組織は、どのような手順・内容でつくればよいのでしょうか。**

(1) 研究組織の改善点の明確化

研究意欲を促す組織をつくるには、次の観点で全教員が反省し、改善点・努力点を考えます。

- 研究課題を解決・改善するために適切な研究組織であったか。
- リーダーシップ発揮の面から研究推進者の指導は適切であったか。
- 人間関係の面で組織が円滑に機能したか。
- 協力体制として分担内容は適切だったか。

(2) 研究組織原案の作成

教員の実態や反省を生かして研究主題に合った研究組織図をつくり、教員一人一人の分担希望を集約します。集約した個人の希望等を配慮して原案を作成します。

(3) 研究組織原案の提示と検討

研究組織の原案を全体に提示し検討します。提示する時には、次のことを十分に説明することが研究意欲を促すためには大切です。

- 校務分掌との関係を考慮して分担したこと。
- 学校の実情に応じて、協働して研究に取り組むことができるようにしたこと。
- 校内研究の推進に当たって、有効に機能する組織にしたこと。

研究を推進する立場で、全教員で研究組織の原案を検討します。

(4) 研究組織の共通理解と決定

研究組織について、自由に意見を出し合える雰囲気の下、全体会で十分に話し合い、共通理解を図り、決定します。

**4 到達目標達成までの過程が明確な年間推進計画は、どのような手順・内容でつくればよいのでしょうか。**

(1) これまでの年間推進計画の反省と改善点

到達目標達成までの過程を踏まえ、これまでの年間推進計画を反省して問題点を集約します。集約した問題点から改善の方向を具体化し、改善点を明確にして共通理解を図ります。

(2) 到達目標の明確化と推進計画の原案作成

研究で目指す児童生徒像を具体的に想定して

共通理解を図り、年間推進計画の原案を作成します。

(3) 推進計画の検討・決定

年間推進計画の原案を全員で検討し、計画を決定します。なお、年間推進計画が計画どおりに推進できるように、研究時間、研究資料、設備等の条件整備に努めることが大切です。

(4) 推進計画の年間教育計画への位置付け

学校の教育目標の具現化のために、校内研究が学校経営と一体化され、十分機能するように年間教育計画へ具体的な位置付けを図ります。

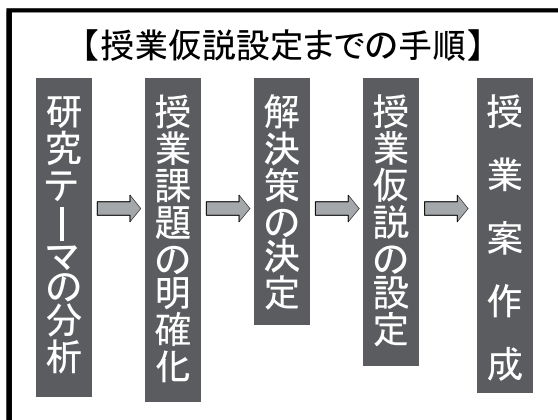
### Ⅲ 仮説検証のための授業実践をどのように進めるか

授業研究には、授業のねらいの達成という大切な目的のほかに、日ごろから解決を迫られている自分の「授業課題の解決」という目的もあります。授業を「自分らしい」授業にするためには、授業研究で「明らかにしたいこと」「確かめたいこと」の絞り込みが大切です。

学校の研究テーマを受けて授業研究をする場合でも、研究テーマをより具体的な視点で見直し、自分の課題とのかかわりを明らかにして、授業テーマを設定しましょう。

#### 1 どのような手順で授業仮説を設定していけばよいのでしょうか

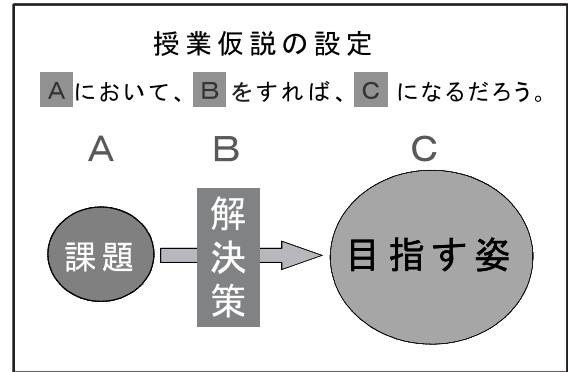
下の図は、「授業仮説設定までの手順」を表したものです。授業仮説を設定するには、授業課題が明確になっていなければなりません。



授業課題を明確にするためには、研究テーマ

が含んでいる研究の方向、研究仮説、研究内容、研究方法の具体的な吟味が大切です。

授業仮説には、課題解決のための手立てが明示されていることが大切です。表現の仕方は、下図で示したとおりです。



#### 2 授業テーマを踏まえた授業の構想

授業仮説が決まれば、それを踏まえて授業を計画することになります。その場合、課題解決のための手立てをどのように授業場面に取り入れていくかということが重要です。

授業構想の視点は、次のとおりです。

- (1) どのような内容構成にするか
- (2) どのような学習過程にするか
- (3) どのような指導方法にするか
- (4) どのような支援をするか
- (5) 評価をどうするか

授業を改善するためには、自分の授業についての課題意識をもつことが大切です。その上で明確な授業仮説を設定し、授業を構想し、実践することにより授業は磨かれると考えます。

#### 3 今、求められる授業研究とは

##### (1) 開かれた授業研究

授業研究を活性化し、開かれた授業研究をするために、次のような視点から取り組んではいかがでしょうか。

- 自分の授業についての課題を明確にし、求める授業のイメージを話し合う。
- 自分の授業で解決すべき課題を具体的に把握し、その解決のための実践事項についてお

互いに話し合う。

- 課題を明確にして、実際に授業を行う。ほかの教員に参観していただく機会をつくる。
- 実践は一度で終わりにせず、児童生徒の変容を記録し、継続的な研究にする。

(2) 継続実践のある授業研究

授業研究では、いわゆる「普段着の授業」を大切に、継続的な実践が可能であるものを重視しなければならないと考えます。

しかも、それらが、どのような成果をもたらしたかというロングスパンでの評価についても考えなければなりません。そのためには一単位の授業に限って研究をするのではなく、単元を通じた実践が有効であると考えます。

**4 校内研究はどのように進めればよいか**

(1) 充実した授業研究

① 個人研修としての事前の研究の例

- ・ 学習指導要領等を踏まえた教材研究
- ・ 先行研究や実践事例の調査・研究
- ・ 指導方法や教材について同僚との協議

以上のような取組みによって、授業案が児童生徒の実態によりふさわしいものになり、自己課題の具体的な解決策をもって、授業研究に臨むことができます。

② 校内研究における事前研究で授業を磨く取組み

- ・ 模擬授業形式の実践例

授業を実施する教員本人が、実際の授業場面を想定し、模擬的に展開しながら具体的な提案をしていきます。途中で質問を取り入れるなどの工夫をすると、話し合いがより深まっていきます。授業が終わった後で、工夫・改善すべきところ等を全員で確認し、実際の授業に反映していきます。

- ・ 授業案作成に付箋紙を取り入れた実践例

授業者の教材研究、指導計画の立案、指導過程の原案作成の段階で、付箋紙の特徴を生かし活用していくことが有効であると思われます。このようにして作成した原案を事前研究会で検討し、修正等のある場合には、付箋紙に書き加えたり、順番を替えたりして、より検証授業に

ふさわしい授業案へと工夫・改善していくことが容易にできます。

(2) 明確な授業観察の視点

授業を参観するに当たっては、日ごろから考えている自らの課題を意識し、目的をもって臨むことが大切です。授業者の授業仮説は、そのまま観察の視点になります。

(3) 効果的な事後研究

個人研究であっても、組織的・計画的に取り組んでいけば、一層授業を磨くことにつながっていきます。

○ 授業者の自評の工夫

授業場面での、自分の意図したことと児童生徒の活動のずれ等の様子や原因を話し合います。

○ 参観記録や様々なデータの活用

参観記録や諸データを発表してもらい、授業を客観的にとらえるようにします。その際、授業者の指導の在り方だけでなく、児童生徒の活動や変容の姿を中心に提案することも大切です。

○ 研究協議（話し合い）を深める工夫

授業の中での事実を中心に、今後の授業に取り入れられることや、改善すべきこと等、話し合いを深めていきます。

**IV 実践や調査資料によって、研究成果をどう検証するか**

**1 研究の有効性を確かめるには**

(1) 研究の成果はどのようにして判断すればよいか

研究とは、ある実践上の課題に対して、「このように取り組めば、課題解決が図れるのではないか」という仮説を立て、授業実践等を通してその有効性を検証するものです。仮説の有効性の検証に当たっては、研究実践者の主観ではなく、調査資料等の客観的なデータから、結果の有効性を判断しなければなりません。このことは、校内研究においても、仮説検証による成果を実証する上で重視される内容です。また、個人テーマの追究においても、一人よがりにならないために、研究手法としてしっかり身に付ける必要があります。特に、授業力を身に付け



る校内研究では、それぞれの成果がデータによって裏付けられていると、成果の積み上げが共有できるようになります。

児童生徒の変容が何らかのデータに基づいて検証された時、仮説の有効性が確認されます。ここでは、仮説を検証するための資料やデータ収集の在り方やまとめ方について考察し、研究成果を共有するための方法を示します。

(2) 仮説検証における配慮事項

研究主題に応じて仮説が設定され、その上で、仮説を実現するための手立てが示され、授業実践が行われます。では、仮説による実践の成果をどのように確かめればよいのでしょうか。

授業を実践すれば、児童生徒の知識は確実に増えます。しかし、そのことだけでは、設定した仮説の有効性を確認したことにはなりません。従来の指導法による学級の群と、仮説に従った別の方法による授業実践を行う群に分けた上で、実践による成果の違いを見る二群法で検証する必要があります。しかしながら、実際の授業実践ではこのようなことは難しいので、学級等ある対象について仮説に応じた指導を行った前後で、児童生徒の実態の変化をとらえ、その成果を検証します。

(3) 検証計画とは

研究仮説により、課題解決のための手立てとしての教育実践の在り方が確定し、実践対象の何が変容すればよいのかが明らかになれば、収集すべき資料やデータが明確になります。そして、集められた資料やデータをどのようにまと

め、教育実践の有効性をどのように確かめるのかを事前に明らかにしておく必要があります。その際、仮説の有効性をどのように確認するかを事前に計画を立て、段階を踏んで検証作業を進めるよう考えることが検証計画です。

2 どのような資料、データを収集すればよいか

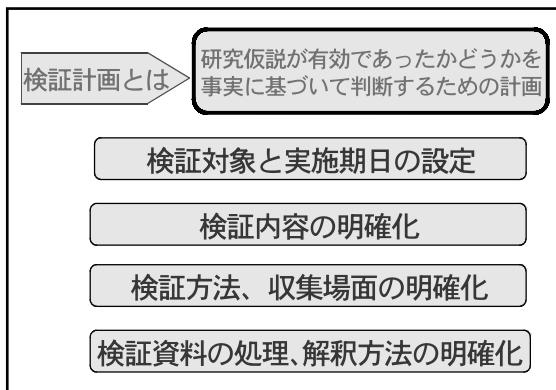
(1) 検証計画に従った資料収集の在り方

仮説に従った指導法の効果を検証するために、検証計画に従って検証対象と検証方法を明確にし、収集すべき資料や収集の時期を決めます。例えば、ある指導法の効果を同一の集団で見る場合、ある観点に従った調査を事前と事後に行い、その変容を調べます。ここで意味をもつのは、ある指導法による児童生徒の知識の獲得よりも、学習意欲や学習スキルの向上等になります。

(2) どのような資料やデータを収集すればよいか

検証方法に従ったデータ、資料収集の方法としては、質問紙、観察、面接、学力検査、そして知能検査等の標準化された検査があります。場合によっては、必要に応じてこれらの方法を組み合わせて実施することもあります。

研究仮説の検証をするために、対象や目的に応じて収集すべき資料やデータを決定していきます。例えば児童生徒の授業への取組みを調べるのには、①児童生徒の取組みを直接示すものとしてのノートやワークシート、作品集としてのポートフォリオ、②授業の感想や自己評価としての調査紙、③学習事項の理解や定着を見るための単元テスト、④授業観察者による児童生徒の行動記録等様々な方法が考えられます。検証の目的に応じてそれらの中から必要なものを選択することになります。



### 3 検証のため、資料、データをどのようにまとめていけばよいのか

(1) 検証計画に沿ったデータ処理の在り方  
 収集された資料やデータは、仮説の有効性を検証するために次の方法で処理されます。

#### ① 統計処理による方法

数的なデータを統計処理することにより検証の基礎データとする方法です。統計処理により、平均値や標準偏差を求めたり、結果をヒストグラムや散布図で示したりできます。さらに、あるデータに統計的に有意な差があるかどうかを、有意差検定を行うことによって明らかにできます。

#### ② 記述による方法

調査結果の事実をありのままに記述していく方法であり、児童生徒の授業中の発言や面接法による調査結果等の処理に用いられます。記述による方法では、一人一人の考えの細かな違いを明らかにすることができます。

#### (2) データの形式と統計処理による方法

収集したデータの形式により、どのようにまとめた方が、研究課題に従った仮説検証ができるかを考慮する必要があります。

#### (3) データ処理による仮説の有効性を確認する有意差検定

##### ① 二つの集団の平均の差

右図のアのように、二つの集団の平均の差に対する有意差を検定するのは、t 検定と呼ばれます。t 検定では二群のデータ数、平均値、標準偏差が明らかになると t 値を求めることができ、その大きさから平均の差に有意な差があるかどうかを統計的に判断することができます。

##### ② クロス集計表

図のイのような、あるデータをクロス集計したのに対して、各集計値同士が誤差の範囲の違いなのか、統計的に違いがあるのかを明らかにする統計処理法で、 $\chi^2$  検定と呼ばれます。

##### ③ 相関関係

図のウのような、身長と体重の関係等、二つの要素からなるデータの散らばり具合を相関係数として調べるものです。相関係数が大きいと、

二つの要素の関係が強いことを示します。

1 組	ア 少人数による指導			イ 教科の好み					
	氏名	事前	事後		男子	女子			
	A	38	28	英語	30	50			
	B	50	60	数学	48	32			
	C	65	82						
3 組	ウ 身長と体重								
	氏名	事前	事後	氏名	A	B	C	D	E
	X	48	68	身長	165	178	160	177	162
	Y	60	80	体重	56	50	65	80	59
	Z	75	70						

データによる統計処理法の違いは

#### ④ 有意差検定の危険性

統計処理による有意差検定は、数学的な正式な手続きを踏むことになりませんが、データのもつ本来の意味を確認しないと、大きな解釈ミスを起こすことがあります。絶えずデータや結果のもつ意味を振り返る必要があります。

### 4 データ処理の結果から仮説の有効性をどのように確認すればよいのか

データ処理の結果から研究仮説の有効性を判断していくことになります。統計的な処理による場合と記述法による質的な処理による場合があり、それぞれの結果を踏まえて適切に判断する必要があります。

その中で検証すべき事項として、以下の事項があります。

#### (1) 仮説と実践の手立ての有効性

収集したデータや資料の検証結果に有意な差が見られたとき、仮説や検証の手立てが有効であったと結論できますが、事前と事後調査のデータの伸びだけで、有効であったと結論付けるのは多少危険でもあります。

#### (2) 児童生徒の変容は

研究の本来の目的は、実態に応じた研究課題により仮説を設定し、具体的な手立てを講じて児童生徒の変容を促すことにあります。研究仮説の有効性を検証することと併せて、児童生徒の具体的な変容もしっかりと把握することが大切です。

## V 研究のまとめをどのように行うか

### 1 校内研究における「研究のまとめ」

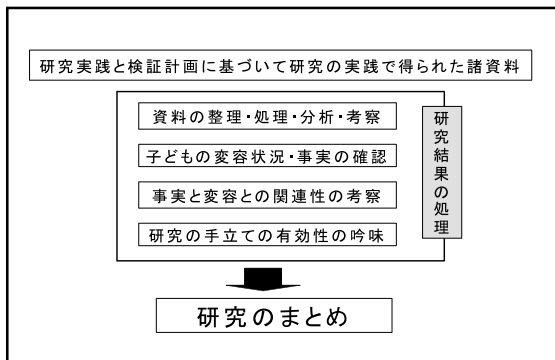
研究のまとめとは、何をどうすることなのでしょうか。まず、研究結果を処理する目的と手順について説明します。さらに、研究の一般的なまとめ方としての項目立てを紹介します。

#### (1) 校内研究における研究結果の処理の目的

研究のまとめとは、研究の手立ての有効性を判断することを目的として行います。児童生徒の変容や学習活動等の事実によって、仮説の有効性を検証することで、研究の手立ての有効性を判断します。

#### (2) 校内研究における研究結果の処理と手順

研究のまとめの手順は、計画的に集められた資料を整理・分析し、児童生徒の変容状況を事実として確認していきます。どの実践が変容につながったのかを明らかにし、手立ての有効性を吟味します。



具体的には、次のような内容を挙げる事ができます。

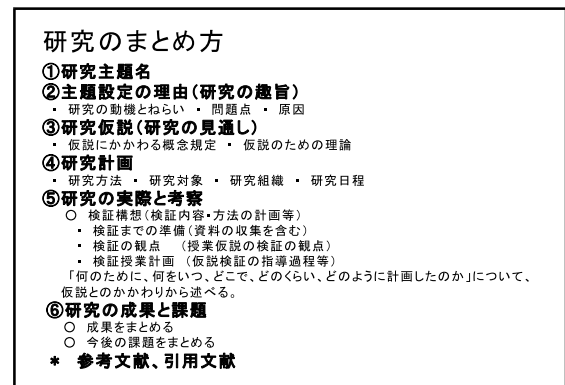
- 授業実践で手立ては具現化されたか。
- 具体的データによる検証はされたか。
- 児童生徒はどのように変容したか。
- 仮説・手立て・検証授業・データの整合性は適切であったか。
- 成果と課題は明確か。

また、これまでの検証から仮説や手立てを必要に応じて修正する必要があります。さらに、研究が発展して新たな課題が生まれた場合は、それを追究する計画づくりにつなげます。

#### (3) 研究物としてまとめるための項目立て

一般的に、下図の項目で研究をまとめ、研究物として整理することが多く見られます。その際、研究成果が共有できるように内容を精選してまとめます。

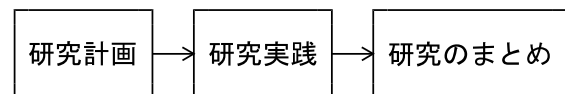
今後の研究において成果を振り返ることができるとポータルフォリオ的な活用を考え、有効なデータや記録を収集します。



## 2 「研究のまとめ」と授業力向上

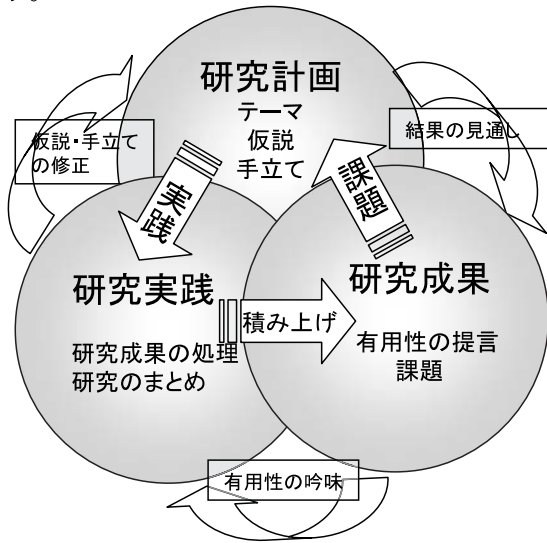
### (1) 研究のまとめの在り方

授業研究で「まとめ」をする場面を想起すると、下図のように研究実践後や研究の最終段階に位置付くと思われがちです。研究計画を作成し、それに沿って授業実践を複数行い、どのような成果があったのかを最終的に「研究のまとめ」で検証するという形式になってはいないでしょうか？



研究のための研究ではない、意味のある研究にするには、PDCAサイクルを生かした授業研究を行う必要があります。絶えずフィードバックに心がけ、テーマ、仮説、手立ての検証を行い、日常的に修正していくことが大切です。追究する方向性は間違っていないか、課題のとらえ方と改善策はズレていないか、そして、授業の中で手立ては有効に機能しているかを、検証として日常的に行うことが大切です。言い換えれば、この検証自体が研究ということになりま

す。



そして、最終段階のまとめでは、これらの検証結果・仮説等の修正の積み重ねを確認し、有用性を立証し提言します。

テーマ・仮説等の検証は、研究のまとめとして終末に行うのではなく、過程で行うことを大切にしなければなりません。更に言えば、研究のまとめをどのようにすべきか、どのようにまとまるのかの見通しをあらかじめ共通理解しておくことが有効です。校内研究では、この見通しを共有できると、まとめの段階で仮説と成果の関連付けも共有しやすくなると考えます。

### (2) まとめの見通しと教員の主体性

校内研究において授業力向上を求めるとき、教員の姿勢が重要な意味をもちます。授業力は、それぞれの教員に個別に身に付くものだからです。

授業の中で、見通しをもつことができると児童生徒は主体的に思考することが可能になり、その結果、学習内容がよく理解できるようになります。校内研究でも、研究の見通しがもてると教員一人一人が進んで研究に参加できるようになると考えます。まずは、「研究のまとめ」のイメージを常に明らかにしておくことです。

また、個人研究のテーマを追究することが、関連した共同研究テーマの追究にもつながり、それらの追究過程での取組みが、学級の児童生徒の変容につながっていることが望ましい状態

だと考えます。

「研究のまとめ」にあたっては、校内研究の手立てから学級の実態に下ろした手立てが有効であったか、学級の児童生徒がどのように変容したか、変容した要因は何か、データで証明できるか、こうした観点で自らの研究成果を明らかにし、フィードバックしながら、成果を積み上げていくことが大切です。校内研究という共同研究のよさを生かしながら、学級の児童生徒の変容を積み上げようとする教員個々の主体性と熱意が授業力向上の原動力になります。

### (3) 授業力向上と教員の主体性

これまで示してきたように、校内研究において授業力向上を実現するには、個々の教員が校内研究にどのようにかかわろうとしているかという主体性が重要なポイントです。共同研究のテーマと個人研究のテーマの関連付けを一人一人が十分に図り、どのような授業力を身に付けたいのかという目的意識とどのような授業力が身に付くのかという見通しをもって、共同研究の追究に取り組むことが重要です。

- 学習内容の解釈・系統性の理解
- 単元学習の構成の在り方
- 児童生徒の学習意欲を高める課題提示
- 論理性を育てる発問の組立て方
- 子どもの反応の見取り方等

児童生徒の姿から学び、進んで自らが必要とする授業力を意図的・計画的に獲得していくために、自らの課題を明確にして、他の教員の技術や意見を参考にし、日々の成果を積み上げていくことが望まれています。

児童生徒一人一人が、確かな学力を身に付け、主体的に生きることができるように、校内研究を核とした、教員の授業力向上に向けた日常的・継続的な取組みが、今、求められているのです。

### 参考文献

- 授業改善ハンドブック「授業を変える」  
「授業を創る」  
「授業を磨く」  
(福島県教育資料研究会)



「高等学校教務主任研修会」  
『学力向上のための授業づくり』  
～校内研修の在り方を考える～

日本女子大学教育学科 教授 吉崎 静夫

1 日本の学力と教育現場の実状について

- IEA調査→教科の「基礎的な学力」  
TIMSS・第4回調査（2002.2調査）  
対象学年（小4、中2）  
小学校（算数・第3位、理科・第3位）  
中学校（数学・第5位、理科・第6位）  
対象教科（算数・数学、理科）  
（1980調査では、すべて1位）
- OECD調査→教科の「応用的学力」  
知識や技術の実生活への応用力（生きる力）  
PISA・第2回調査（2002.7調査）  
対象学年（高1）  
数学的リテラシー（6位）読解力（14位）  
科学的リテラシー（2位）  
問題解決能力（4位）
- 国内学力調査→教科の「基礎的な学力」  
小中学校教育課程実施状況調査  
（2004.1～2調査）  
対象学年（小5～中3）  
対象教科（国語、社会、算数・数学、理科、英語）  
前回調査（2002）との同一問題に関して  
「有意に上回る」約43%  
「有意な差がない」約39%  
「有意に下回る」約17%

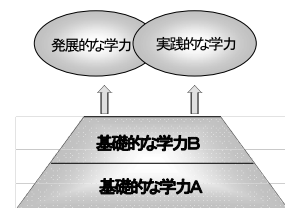
上記の調査結果から、日本の子どもは、選択肢の中に必ず正解があると思ひ、どちらでも良いものを選べなかつたり問題に対する意見が書けなかつたりしていることから、知識や技術を実生活に生かす力が乏しいことが分かった。

このことは、ゆとり教育の影響ではなく、学習意欲（世界最低レベル）の低下がもたらした

ものとも言えることである。

現在の日本の子どもたちが身に付けなければならない学力は四つあると考えられる。

四つの学力の相互関係



- **基礎的な学力A**  
教科学習や社会生活の基礎となる学力「読み・書き・計算・コンピュータリテラシー・英語コミュニケーション能力」
- **基礎的な学力B**  
学習指導要領に明示された目標・内容に基づく教科の学力
- **発展的な学力**  
学習指導要領の目標・内容を発展させたり、複数教科間の関連付けを図るような教科の学力
- **実践的な学力**  
教科の枠を超えて現実の社会的課題や自らの生き方にかかわる課題を発見・解決する学力

「読み・書き・計算」の伝統的学力や新時代の基礎「コンピュータ・英語」（基礎的な学力A）と「学習指導要領の内容」（基礎的な学力B）を土台とした基礎的な学力の上に、発展的な学力と実践的な学力が偏ることなく、養われなければならない。これらがバランス良くトータル的に育てられることにより、世界の中で生き延びることができる力「生きる力」が身に付くと考える。

これまでの学校教育では「仕事をこなす人」の育成はしてきたものの「仕事のできる人」の基礎は育ててこなかったのではないだろうか。現代社会が求めているのは、「仕事をこなす且つ仕事ができる人」である。このために、教師には、社会が求める人材を育てるための力量が求められており、自己研鑽を積むとともに校内研

修が有効的に実施される必要がある。

## 2 校内研修について

### (1) 校内研修の特徴

**現場性**(臨床性)→問題の共有化

**同僚性**(協働性)→多様な教職経験・力量

**共通性と個別性の共存**

→「授業や学級経営における基礎・基本」

→「授業についての思い(授業観)」

### (2) 校内研修の課題

**ノウハウが蓄積されにくい**

→中心的な役割を果たす個人に依存

**学校文化(伝統)の枠組みに規定される**

→校内研究のマンネリ化

→モデル教師の不在

**授業力や学級経営力の向上につながりにくい**

→校内研修(研究授業)の方法の限界

→発達課題の不明瞭化

**大学等の研究機関からのインパクトが小さい**

→研究と実践の乖離

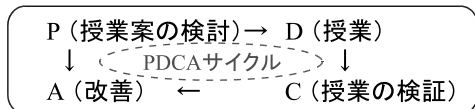
**教科間の壁**

→校内研修の妨げ(特に、中・高等学校)

### (3) 校内研修への提言

**研究授業の位置付け**

→「P→D→C→Aサイクル」の中核に



**研究授業方法の検討**

→資料に基づく討議

(ビデオ、アンケート、テスト等)

→改善案(代替案)の提示

**研究授業の成果(知見)の蓄積**

→「カリキュラムの管理」

### (4) 校内研修の実践Ⅰ(上田市立北小)

**算数の授業における習熟度別学習**

→計算力等、基礎学習に効果的

→図形等、数学的思考方を要する発展的学

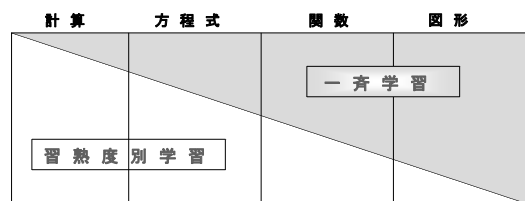
習では全体の効果は得られにくい

(基礎クラスはモデル不在のため、考えが深められない)

習熟度コース別テスト得点(上田市立北小)

	知識・理解	表現・処理	数学的な考え方
基礎コース	88	81	64
標準コース	83	87	75
標準コース	93	89	78
発展コース	91	92	94
全国平均	80	80	75

数学の教材(単元)内容と「習熟度別学習」「一斉学習」との関係(中学校の場合)



### (5) 校内研修の実践Ⅱ(館山市立北条小)

**プランの継続性と革新性**

**教員組織の独自性**

**カリキュラムと授業の連続性**

**授業実践と教師教育の一体化**

→教師の力量形成

### (6) 授業分析・評価の方法

**授業リフレクションのためのVTR中断法**

→自分ならどうするか(代替案)

**子どもの内面過程を把握する再生刺激法**

→授業場面での子ども認知・情意

**実践的な学力は、長期的な評価を**

→課題発見力や計画力等、観点を決めて複数年の学習履歴をとることにより、子どもの成長度が把握できる。

## 3 まとめ

現在の学校教育は、一人の教師の力だけでは運営できない。教師同士が知恵を出し合うことはもちろんのこと、保護者や地域社会の連携を図り授業をデザインすることが必要となる。「生きる力」の育成のためには、授業への思い(ねがい)、発想力、構成員、教材力(教材解釈力、教材開発力)を駆使し、意欲ある教育活動を展開する環境整備が重要である。

## 講座紹介



### 「今日的諸問題の理解と対応講座1」

(不登校等の理解と対応講座)

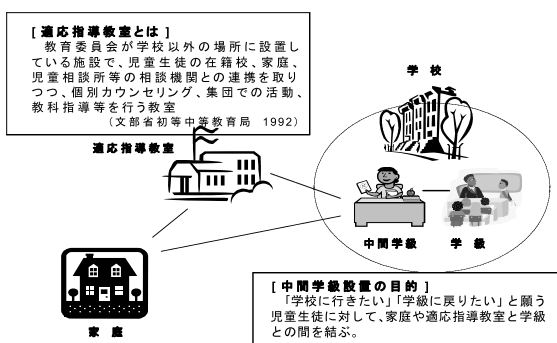
## 『中間学級における校内適応支援の在り方』

～不登校児童生徒の教室復帰への援助指導～

龍ヶ崎市教育センター教育相談員 茅野理恵

### 1 中間学級とは

家庭や適応指導教室から学級に復帰する途中の段階にある児童生徒のための学級です。



### 2 中間学級における校内適応支援

中間学級も学級の一つの形態と考えます。

#### ① 生活支援

しっかりとした日課表を作り、学級担任も設置します。日課表に沿った生活は、学校生活のリズムを作り、学級復帰へのハードルを低くします。また、二人担任制により、担当教員の負担を軽減するとともに、児童生徒への個別の相談や支援が可能になり、対人関係スキルの向上を図ることができます。

#### ② 学習支援

時間割に沿った教科担任による授業とし、個別指導やグループ活動を行います。学級復帰のためには、学習面での不安を軽減し、学力の保障を図ることが大切です。

#### ③ 設置場所

中間学級の設置場所については、職員室や保健室、トイレ・水道、普通教室との位置関係等にも配慮します。

#### ④ 校内連携

養護教諭を中心とした支援体制を組むと、体調の管理、からだに関する相談も行うことが可能になります。中間学級にいる児童生徒とともに、学級・学年全体の児童生徒への配慮も必要になってきますので、教職員間の共通理解・連携が大切です。

### 3 外部連携成功のためのポイント

今、外部機関との連携において学校に求められる力は、「外部資源活用能力」です。プロの教師集団として「やるべきこと」の再認識をしつつ、学校の限界についても認識する必要があります。外部機関の機能について十分理解しておきましょう。キーワードは、「足を運んで！顔を見て！」です。どの機関にどんな担当者がいるのか把握しておきましょう。

### 4 学校・教師への期待

日々の小さなサインの早期発見・早期対応は、教師だからできる、教師にしかできない相談活動です。不登校・不適應の予防的対応こそ教師の本領発揮の領域です。

家庭にいたり、適応指導教室に通っていたりする児童生徒が中間学級に登校できるようになるためには、教員が家庭や適応指導教室を訪れ、本人との信頼関係を築いておくことが不可欠です。



## 『軽度発達障がいへの理解と対応』

福島大学教授 水野 薫

### 1 軽度発達障がいとは

軽度発達障がいとは、学習障害（LD）、注意欠陥／多動性障害（AD/HD）、高機能自閉症やアスペルガー障害等の広汎性発達障害（PDD）の総称です。これらの障がいは診断上は重複しないことになっていますが、現実には複数の障がいの特徴を併せ持つ児童生徒がいます。具体的な指導援助策を考えていく際には、診断名にこだわらないほうがいいでしょう。

### 2 軽度発達障がいに起因する行動上の困難

軽度発達障がいに起因する行動上の困難として、次のようなことが挙げられます。

- ◇ 学習障害（LD）
  - ・状況がつかめない
  - ・思っていることをうまく言えない
  - ・何から手をつけたら良いかわからない 等
- ◇ 注意欠陥／多動性障害（AD/HD）
  - ・思いついたら待てない
  - ・いろいろ考えて收拾がつかない
  - ・些細なこと（音・動く物等）に気をとられて目の前のことを忘れてしまう 等
- ◇ 高機能自閉症等の広汎性発達障害（PDD）
  - ・雰囲気や相手の気持ちがかめめない
  - ・原理原則を貫こうとする
  - ・自分なりの論理にこだわる 等

### 3 思春期以降の深刻な二次障がい

軽度発達障がいを抱える児童生徒に適切な対応をししないと、思春期以降に不登校や社会的ひ

きこもり等の神経症的な症状や、薬物乱用、暴力等の反社会的な症状、幻覚や錯乱などの精神病的症状を表出することもあります。

### 4 AD/HDをもつ子への対応例

#### ① 見通しがもてるようにする

取り組むべきことの全体像や手順を、黒板や用紙を使って文字情報として示します。

- |   |   |                  |
|---|---|------------------|
| 例 | 1 | もんだいを大きなこえでよむ    |
|   | 2 | しきをかく            |
|   | 3 | けいさんする           |
|   | 4 | こたえをかく           |
|   | 5 | おわったら先生にほうこくする 等 |

#### ② 優位な能力を活用する

聴覚より視覚による認知が得意な子に対しては、「しずかに」「あとで」等をカードに書いておき、場に応じてそれらを提示します。

#### ③ 片付ける場所を指定する

机の横に箱を置き、文房具や着替えを収納させます。箱にはそこに入れるものの絵を描いておくと、より分かりやすくなります。

### 5 中学・高校で望まれる対応

中学・高校においては、複数の教科担任に合わせられるようになることが重要です。数名の大人に合わせることはできなければ、世の中の人人に合わせることはできないからです。そのためにも「授業中のルールの徹底」が大切です。特別な事情があるとき以外は、他の生徒と同じように対応するのが原則です。



学校評価  
研究チーム

## 『学校経営・運営ビジョン』に基づく 調査内容の見直しと調査紙づくり

### はじめに

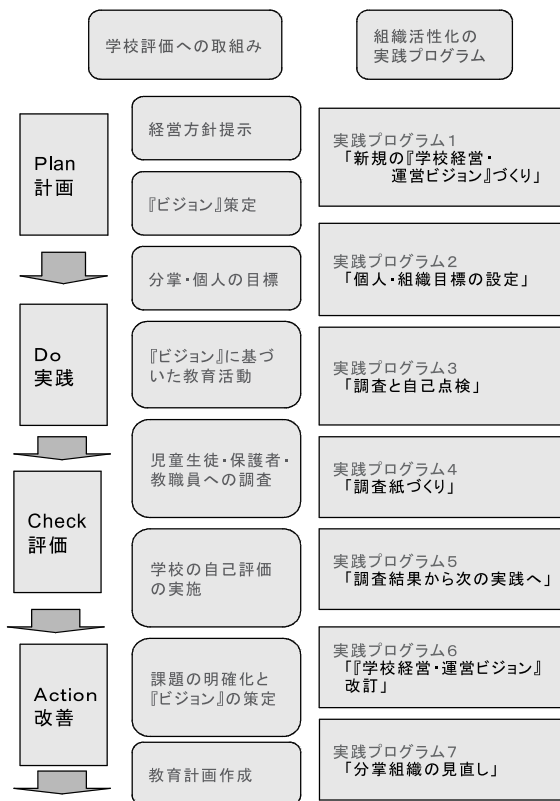
昨年度当チームは、学校評価を生かした学校組織活性化の在り方に関する研究を進め、学校組織活性化を図るための手立てとして、「実践プログラム」を作成しました。今回は、「実践プログラム」の概要の説明と、「調査の見直し」に関する研究協力校での取組みを紹介します。

### 1 組織活性化のための「実践プログラム」

実態調査から明らかになった教職員の参画意識の不足や分掌組織の見直しの必要性等の課題と、調査実施校での組織活性化の実践例を基に、学校組織活性化のための七つの「実践プログラム」を作成しました(下図参照)。このプログラムは、以下のねらいの実現を目指したものです。

#### (1) 教育目標に教職員が向き合う

『学校経営・運営ビジョン』を基に、各校務分



掌や教職員一人一人が学校の教育目標の実現のためにどうかかわるかを考える。

#### (2) 教職員の課題意識の共有を図る

校内研修における演習形式の研修会や協議会で、教職員同士が課題や目標を共有し合う。

#### (3) 実践の主体、手立て等の明確化

教職員同士の話し合いにより、具体的な実践事項を明らかにする。その際、実践主体、手立て、達成目標としての指標を具体的に設定する。

### 2 調査内容の見直しの実践例（A小学校）

A小学校では、学期末に学校の取組みを振り返るための評価が行われていました。また、平成17年度から、『学校経営・運営ビジョン』による評価も取り入れたために、従来の学期末評価と併せて2種類の評価が行われることになりました。

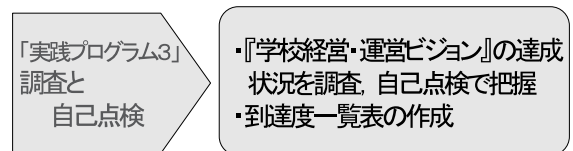
#### (1) 調査内容の見直しの視点

上の現状を踏まえ、学校評価にかかわる調査の在り方について、以下の2点を提案しました。

○ 評価活動の一本化を図るため、学期末や年度末に行われる反省を『学校経営・運営ビジョン』と対応させる。

○ 調査事項の精選を図るために、調査内容を調査すべき内容と自己点検できる内容に分類する。その上で、調査すべき内容については調査紙を用いて調査を実施し、自己点検も行う。

具体的には、下図のような「実践プログラム3」の内容に関する提案でした。



#### (2) 調査と自己点検すべき内容の分類

##### ① 調査項目設定の現状

A小学校では平成16年度までは、学期末や年度末反省の調査内容は学校運営全体を対象としていました。しかし、学校評価の実施の在り方に関する提案により、平成17年度からは『学校経営・運営ビジョン』に対応した内容の調査が実施されました。

平成17年度『学校経営・運営ビジョン』到達度一覧表(中間評価)

重点項目	実践内容	対象	基準・指標			調査番号	
			内容	基準	到達状況		
知	話を聞き、話す	1 聞こうという意欲	児童	聞く児童	95%	83%	1
		2 話す意欲	児童	1時間に話す児童	50%	51%	2
	自分の考えを持つ	3 児童が明確な考えを持つ	児童	考えを持つ児童	70%	68%	3
		4 話し合い活動の充実	教師				
	学力テストの結果向上	5 児童主体の授業	教師	国語と算数の学力	1ポイント		
		6 教材提示、習熟度別学習	教師	テストの偏差値アップ			
徳	一人一人のよさ	7 よさを認めあえる場	教師				4
		8 わくわく班の異学年交流	教師	交流活動	月1回	0.9回	5
	道徳授業充実	9 友達、家族、地域との関わり	教師				6
	外国の文化にふれる	10 国際理解教育	教師	実施回数 低学年	5～10回	3.8回	7
				高学年	15～20回	9回	
	地域社会とのふれあい	11 教育環境の整備	教師				
	12 ゲストティーチャーの学習	教師				8	

② 「到達度一覧表」の作成による調査内容の分類

12月に実施された2回目の調査に先立ち、『学校経営・運営ビジョン』に対応した事項を整理するための「到達度一覧表」を作成しました。そのことにより、調査内容を校内の記録や教育実践で得られる資料等で自己点検できる内容と、意識や実態等、調査をしなければ分からない内容とに分類しました。(参照 平成17年度『学校経営・運営ビジョン』到達度一覧表(中間評価))

③ 調査の見直しによる効果

年度末には『学校経営・運営ビジョン』に沿った評価活動にすることで、昨年度までの二重の評価活動を一本化し、評価内容も焦点化することができました。

3 調査紙づくりの工夫の実践例(B小学校)

B小学校では例年、保護者や児童に対して教育活動全体に関する調査を実施してきました。その際、学校の重点目標やアンケート調査の目的が事前に保護者に十分に伝わらなかったため、保護者から多岐に渡る要望や意見が出され、調査結果が焦点化されずに、次の実践に十分生かすことができませんでした。

(1) 調査紙づくりの際の調査目的の再確認

上の現状を踏まえ、調査実施のねらいについて、以下の2点を提案しました。

- 『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査内容とすることによって、改善の方向性を具体化・焦点化する。
- 調査によって、保護者自身が取組みを振り返り、学校と一体になった子育てを行うという意識をもつことができる設問を工夫をする。具体的には、次の図のような「実践プログラム4」の内容に関する提案でした。

ム4」の内容に関する提案でした。

「実践プログラム4」  
調査紙づくり

・『学校経営・運営ビジョン』に対応させた調査項目

・調査対象が当事者意識をもつ設問

(2) 調査の実施

① 『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査

B小学校では、9月に『学校経営・運営ビジョン』と対応させた内容による調査を実施しました。調査内容を『学校経営・運営ビジョン』に対応させたことにより、調査結果を用いた教職員の話し合いも焦点化され、12月には改訂『学校経営・運営ビジョン』を学校内外に向けて発信することができました。

② 調査実施の意図の明確化

年度末に実施した保護者対象のアンケートは、保護者と児童とのかかわりの実態や意識を調査する形式に改めました。また、アンケートには、調査項目に反映できない保護者の意見を集約するために、自由記述欄が設けられました。

保護者への調査の結果は、家庭での子どもの状況を反映したものになりました。また、年度初めに実施したアンケート結果と異なり、自由記述欄に記入された内容は、調査項目と関連した記述へと変化し、保護者に直接回答できる記述も多く見られました。

4 おわりに

今回は、学校組織活性化のための「実践プログラム」の概要と実践例の一部を紹介しました。

詳細につきましては、昨年度末に発行した『学校評価の活用 学校評価を生かした学校組織活性化の在り方』に記載されています。本冊子を参考に、学校組織の活性化に向けて工夫・改善をしていただければ幸いです。

## 「観」の見直し

### 1 はじめに

本県の喫緊の教育課題の一つとして、子どもの学力向上が挙げられています。各学校では、「学力向上を図るための中心は日々の授業である」という認識に立ち、授業改善に向けた具体的な取組みが進められています。

そこで、本連載では3回にわたり、各校で取り組むべき授業改善の一助となるよう、改善の視点、望ましい授業の在り方等について述べていきます。

1回目は、授業を改善するにあたって、どこから切り込んでいけばよいかといった授業改善の視点を中心に考えていきます。

### 2 まずこれまでの授業を振り返る

教育センターで研修をされた多くの先生が、自らの授業の反省点を熱く語るのをよく耳にします。いくつか挙げてみます。

- 子どもの学習への構えが受け身になりがちであるため、基礎的・基本的な内容の定着を重視した指導を見直してきた。
- 読解力が身に付いていない子どもは、文章問題や応用力の必要な問題を苦手としがちである。
- 集中して授業に取り組めるようになってきたが、学び方が十分身に付いていない様子が見られる。
- 課題に向かって取り組むことはできるも

のの、その後の学習の発展や広がりには乏しい傾向にある。

- 自分の考えをしっかりと持ち、友達と共に互いの考えを練り上げるという姿が、まだ十分とはいえない。

自らの授業を振り返る先生方の言葉の端々から、どの先生も「子どもの側に立った授業」「確かな学力を身に付けさせる授業」を大切にしたいという強い思いを抱いていることが読み取れます。

日々の授業の営みを通して、そのような授業像が具現できるように、今回は、私たちがいつも授業を構想をする際に、当たり前前の観点としてとらえている三つの「観」について見直してみたいと思います。

### 3 授業改善の視点—「観」を見直す—

#### (1) 教材観を見直す

教材には様々な教育的価値が含まれています。そのうち、どの価値に着目して教材を活用していくか、そこに教師の力量が問われています。単元の目標や本時のねらいとのかかりから教材そのものの価値を再度見直す必要があります。

また、主たる教材として、どの教室においても教科書が活用されています。教材研究の際には、教科書に記載されている表面的な事柄だけでなく、既習内容とのつながりや、そ

の後の単元への発展性にまで目を向け、系統性をとらえながら分析することで、よりきめ細やかな指導につなげることができます。

### (2) 児童・生徒観を見直す

子どもがつまづく一因に実態把握が十分でなく、それが授業に生かされていないということが挙げられます。実態把握の観点を実際の授業と結び付けて設定し、どう授業に生かすかまでを考えることが大切です。

実態把握の際に、ともすると私たちは学級の子どもをひとまとめにしてその傾向を見てしまいがちです。獲得している知識・理解の度合いや見方・考え方が異なる個々の子どもから、学級集団は成り立っています。学級の全体的傾向を把握することは必要ですが、「個」に目を向けるという意識は常に持ち続けたいものです。

### (3) 指導観を見直す

指導の手立てを考えるときには、子どもの側に立った授業展開を構想し、子どもの思考過程に基づいて、指導の在り方を見直すことが大切です。

この場合、「教師—子ども」の関係だけで、授業を構想してしまうと、実際の授業でも教師と子どもの1対1のやりとりだけになってしまうということがあります。子ども同士が、教材を介して議論し、互いに学び合っていく過程を大切にすることが必要です。

この子ども同士のやりとりが何度も繰り返されることによって、子どもは、既習内容とのつながりをとらえながら、考えを広げたり、深めたりしていくことができます。このような学び合いを支えるために、教師はどのような発問をすべきか、どのように助言や支援をすべきかを考えることが大切です。

そして、常に、授業で目指す子どもの姿を思い描きながら、授業構想をすることによって、学習目標達成に向けた授業とすることができると考えます。

## 4 本研究チームの方向性

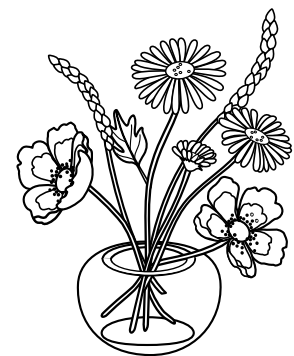
現在、本研究チームでは、子どもが課題意識を持ち、主体的に学習に取り組むことができるような授業の創造をめざし、研究に取り組んでいます。

子どもが活発に交流し合い、そのかわりの中から知識や技能が相互に関連付けられ、意味のあるものとして身に付けられるような授業の在り方を探っています。

## 5 おわりに

私たち教師にとって、子どもの成長・変容のために、授業改善は不可欠な課題であると考えます。地道な努力こそ、その早道であるとの認識に立って日々の授業実践を重ねていきたいものです。

次回は、授業改善の実際について述べてみたいと思います。



情報化推進  
研究チーム

## ネットワークによる授業づくりの改善をめざす 「教員ネットワーク」の構築をめざして

PISAおよびTIMSSの学力調査の結果が公表され、児童生徒の「学力低下」が問題となっています。私たち教員は学力低下の原因を分析し、それを基に指導力向上に努めなければなりません。

しかし、私たちが指導力向上のために必要な研修に参加したくても、学校を離れるということが容易にできないのが現状です。

「もっと研修を積み、指導力を磨きたい。」情報化推進研究チームでは、そんな多くの教員の熱意を支援することができないかと考え、昨年度からITネットワークを活用し授業づくりの改善を目指す「教員ネットワーク」の構築に取り組んでいます。

### 1 教員ネットワークとは？

県内の小・中・高・盲・ろう・養護学校では高速インターネット回線接続率83.5%、普通教室のLAN整備率62.4%等<sup>(1)</sup>、IT環境の整備が進められています。また家庭でもインターネットを利用する先生方が多くなってきました。

情報化推進研究チームでは、この整ったIT環境をより効果的に活用し、授業改善を実現するために、教育センターWebサイト上に県内の先生方を結ぶ「教員ネットワーク」Webサイトを構築しました。研究に参加している先生方は、このWebサイトを利用することで、都合のよい時間に、それぞれの学校から研究成果を発表したり、意見や感想等を送信したりすることができます。

また、この取組みで得られた成果を教育センターWebサイト上で随時公開し、だれもがよりよい授業づくりに役立てることができるように整備しています。

現在は、「小学校算数科教員ネットワーク」（代表：福島市立森合小学校：穴戸与一教諭）と、「小学校理科教員ネットワーク」（代表：福島市立岡山小学校：山本巖教諭）を立ち上げ、本チ

ームが、Webサイトの構築・運営やデジタルコンテンツ<sup>(2)</sup>の作製等のコーディネートを行っています。

#### 〈小学校算数科教員ネットワーク総合サイト〉



<http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/3kenHP/sansu/index.html>

#### 〈小学校理科教員ネットワーク総合サイト〉



<http://www.center.fks.ed.jp/15ken3/rika/rika.html>

※ 授業の様子を録画したものを、授業案の中にビデオクリップ<sup>(3)</sup>にしてはり付けて公開しています。そのため授業案だけでは伝わらない実際の発問や児童の反応を視聴することができます。ただし当面は会員の著作権や児童の肖像権保護の観点から、これらの閲覧はパスワードで制限し、会員（参加自由）のみに限定しています。

註(1) 平成17年9月30日現在、文部科学省調べ

註(2) デジタルで表現された音楽、画像、映像など

註(3) Webページに埋め込まれた短時間の動画

## 2 研究の方向性

今年度は、これまでに蓄積してきた「教員ネットワーク」を発展させ、小学校全教科における「教員ネットワーク総合サイト」の構築を目指します。そして、県内の先生方がいつでも手軽に情報を収集したり、教育センターと学校間が双方向で研究・開発を行ったりすることができるような新たなネットワーク研究の展開を創造しています。

### 〈教員ネットワーク総合サイト構想〉



<http://www.center.fks.ed.jp/15ken3/network.html>

## 3 教員ネットワーク総合サイトの構想

### ① 多様な教員ネットワークの構築

昨年度構築した算数科、理科だけではなくすべての教科について教員ネットワークを構築し、授業改善を目指す先生方の連携の支援をしていきます。また、教科の枠を超えた連携として、新たに「養護教諭ネットワーク」と「小規模学校ネットワーク」の立ち上げのため準備を進めています。

### ② 各学校メールアドレスの収集

昨年度より引き続き、各学校から入力への協力をいただきました。収集した約782校の小・中学校のメールアドレスを活用し、教育センターから様々な教育情報を提供できるようにします。また、メールを活用し、学校と学校が連携した共同研究や交流学習、教員間の情報交換等様々な取り組みを実現していきます。

### ③ 「現職教育テーマ」「総合的な学習の時間テーマ」検索サイトの構築

総合サイトの中に「現職教育テーマ」「総合的な学習の時間テーマ」検索サイトを構築します。各学校の現職教育の研究教科、テー

マ、研究内容や学年ごとの総合的な学習の時間におけるテーマ等を有効な教育情報として紹介します。また、このサイトから現職教育や総合的な学習の時間に関する情報を検索することで、学校間での共同研究・交流学習等、内容を発展させることが可能になります。

### 〈「総合的な学習の時間テーマ」検索サイト〉



### ④ その他のサイト

本チームでは、このほかにも「ふくしま教育情報データベース」、「授業に役立つWebサイト集」、「ITを活用した授業実践事例集」等授業づくりに役立つ資料の提供をしています。また、今年度から福島県小学校教育研究会の資料を収集し、学年・単元別に整理してデータベース化を行います。さらに、県内の自主的研究団体の活動の様子を紹介することにより、教員がより有効な研修に進んで参加できるように支援しています。

## 4 指導力向上のために

教員ネットワークの目的は、県内全域の先生方が自由に参加し、一つの授業や教材等について意見の交換をしながら指導力に磨きをかけていくことです。教育センターでは指導力の向上を目指す先生方の日常的な授業改善を支援します。「〇〇科の研究を深めたい。」「〇〇科の授業力をアップさせたい。」と思っている先生方、県内の先生方と連携する教員ネットワークに参加して、児童生徒のために指導力向上を目指してみませんか？

情報化推進研究チーム

TEL 024-553-3141 (内線17)

e-mail: shima.kazuhiro@ks15.fks.ed.jp

kunii.hiroshi@ut33.fks.ed.jp

## 平成18年度情報教育講座のご紹介

皆さんは、情報教育講座がいくつあるかご存じですか。現在、13の講座が皆様をお待ちしております。今回は各講座の内容の特徴についてご紹介します。

### 1 Excel入門・PowerPoint入門

さあ、これからパソコンを使ってみようという初心者の先生方を対象とした講座です。Excelは成績処理、PowerPointは授業に使えるスライドの作製を研修します。また、これら二つの講座は、研修先が県内4地区で行う1日研修です。担任や部活動等が忙しくて研修の機会を逃しがちな方に気軽に来ていただけるように日程も夏休み中に設定しました。

### 2 Excel中級

もう少しExcelを使いこなしたい方にお勧めします。ここでは、関数を学校で使う事例に合わせて研修します。関数をマスターすると、Excelを使った校務処理や成績処理等、どのようなことでもほぼできるようになります。

### 3 Accessを用いたデータベース入門

AccessはExcelを基にしたデータベース作成ソフトです。ここではExcelを研修した方が、Excelで集めたデータをまとめたり効率よく取り出したりするいわゆるデータベース化について研修します。

### 4 デジタル映像編集・プレゼンテーション技法

例えば、夕焼けを生徒に見せたいとデジカメで撮影しても、後で見るとどうもあの感動がないという経験がありませんか。

デジタル映像編集は、カメラやビデオの撮影手法等、画像・映像のパソコンへの取り込みやCM作成等を手がけている外部講師による映像表現の実技演習を通して、先生方の思いがうまく生徒に伝えられる技法を研修します。撮影に自信がない初心者の方でも気軽に参加できる入門講座です。

プレゼンテーション技法は、「脱PowerPoint初心者」を目指した講座です。自分の考えを積極的に表現するための手法が手に取るように分かります。外部講師も日本を代表するプレゼンテーションの専門家をお願いしました。

### 5 フリーソフト活用

「市販のソフトは高価で買えないが、何か同じ機能で使えるソフトはありませんか。」という多くの声にお応えします。

具体的に挙げると次のような研修を予定しています。

①オフィス系ソフトに対応したOpenOffice入門。②パソコンを守るためのアンチウイルスソフト、スパイ対策ソフトやファイアウォールソフト等のインストールから使いこなすまでの研修。③その他USBカメラの驚く

ような利用法からDVDの作成まで、授業で活用できるフリーソフトの幅広い研修。

## 6 学校Webサイト作製

ホームページビルダーを用いたWebページ作製の研修を行います。単にWebページを作製するだけでなく、だれも見やすい、更新や管理のしやすい、Webページの作製方法を研修します。また、学校Webサイトの実際の運用について様々な疑問を外部講師の先生との研修で解決できる講座です。

## 7 ネットワーク活用

「校内のネットワークは、うまく活用されていますか。単に共有フォルダにあるデータを使うだけになっていませんか。」この講座では、ネットワーク構築の実技と校内ネットワークを活発に活用するための手法について研修します。特に、ネットワーク活用では、企業で使用しているグループウェアと同等の機能を持つ無料のグループウェアを紹介するとともに校内ネットワークにおける活用法について実習を交えて体験します。

## 8 プログラミング言語

IT機器が普及してきた現在、新たに機器やプログラム開発者の不足が問題となってきています。福島県でも高校生を対象とした「パソコン甲子園」で、この問題の解決に大きな働きかけをしています。そこで、パソコンやプログラムに興味のある生徒の指導、画面のボタンを押すと画面が変化するというようなWindowsアプリケーションの作製、授業に役立つ簡単なプログラムを組んでみたいという先生方へお勧めの入門講座です。言語はVisual

Basic.netとC++Builderです。

## 9 普通教科「情報」

普通教科「情報」を担当している先生方を対象とした講座です。実施から4年が経過した普通教科「情報」ですが、その間に「情報」を取り巻く状況も大きく変化してきました。今後、普通教科「情報」はどう動くのか、実習は今のままでよいのかなど、皆さんの抱える疑問や不安にできるだけこたえるための実践的な講座です。

## 10 情報モラル

県内7地区で、すべての公立小中高等学校から代表の先生に出席していただき、昨年度から実施しています。一昨年の長崎県での不幸な事件を皮切りに児童生徒を被害者や加害者にした多くの事件・事故が起こっています。例えば、児童生徒が巻き込まれた「出会い系」の事件は、昨年だけでも827件(H17、被害者、小中高校生の警察庁検挙数)に上ります。こうした中で学校が打てる手は何か、どのような危険性を教えたらいのか、教師はどのような知識が必要なのかなどを研修する講座となっています。

## 11 もっと知りたいパソコン教室

少し敷居の高いと言われているマクロの基礎を1日で体験するExcel応用講座です。Excel中級を受講された方向けに構成されています。なお、土曜講座は、申込み方法が一般の講座と異なりますのでご注意ください。

以上13講座で、情報教育チームは、今年度も先生方を応援します。



教科外教育チーム

## 新入生の導入期指導について ～高等学校における活力のある生活のために～

新入生を迎えて、各学校では入学時における学校生活の導入期指導がなされたと思います。ここでは昨年の連載を踏まえて、新入生の導入期指導を進める上で、組織マネジメントを実効あるものにするためのポイントを述べます。

### 1 組織としての対応！

毎年新入生を迎えて、どのような導入期指導が良いのか、また、効果があるのか、話題には挙がるがそれを次年度に生かし切っていないところがあります。新学年担当者任せになっているため、なかなか改善されないのも事実です。組織としての対応が十分なされずに、新入生を受け入れてしまったためかと思われます。そこで、P（計画）－D（実践）－C（評価）－A（改善）サイクルを意識して組織的に機能させてみてはいかがでしょうか。

次年度に向けてのスタートは、実施してのC（評価）からA（改善）に重点を置いた継続的改善が大切です。ここでは、実践例をP D C A サイクルで考えてみます。前年度を検証して、次の4点が挙げられたとします。

- (1) 開講式と閉講式をしっかりと行うこと。
- (2) 新学年担当者任せではなく、教頭、教務主任を中心に組織的な体制を組み立てること。
- (3) 教務で話すこと、進路指導で話すこと、生徒指導で話すこと等を軸に、イラストや図表を入れた冊子を作成し、新入生が見てすぐ分かる内容とすること。
- (4) 使用した冊子が、各クラスのロングホームルームに活用できること。

これらのことを踏まえて計画を立ててみてください。

### 2 学習指導！

新入生に対して、学ぶとは「新しい自分に出会うこと」「自分の可能性を広げること」「自分の夢を実現すること」、そして、「生きるために必要なものを求めて行くこと」を話します。

高校では、中学校で学習していない科目が登場してきます。科目数も多くなり、より専門的な学習をすることになります。中学校と違って進級・卒業には条件を満たすことが必要になることを説明します。その後、下のチェックシートを用いて中学校の次のステップに進んだことを自覚させることが重要になってきます。4～5月はずなぎ教材等を使い、中学校の英数を復習させて教科書に入ることも大切です。3年間を見通した生活ができるようにします。

さらに、部活動の奨励を含めて高校時代に部に入り活動の中から人間関係を構築させます。

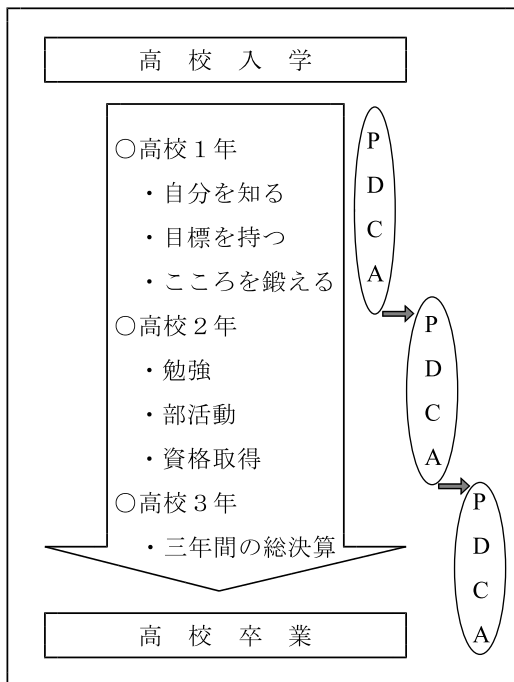
#### （例－高校の授業や進級の仕組みチェックシート）

- (1) 授業が週に2回ある場合は？ ( )単位
- (2) 2単位で欠席可能な時間数は？( )時間
- (3) 定期考査は？ 年 ( ) 回
- (4) 定期考査の合格点は？ ( ) 点以上
- (5) 評定の5段階評定とは？  
5 (     ~     )  
4 (     ~     )  
3 (     ~     )  
2 (     ~     )  
1 (     ~     )

### 3 進路実現に向けて！

新入生の導入期指導で、生徒一人一人に高校3年間の進路目標を立てさせ、次頁の図のよう

に進路実現に向かって学習する大切さを学ばせます。進路目標を立てる時のポイントは、①「どんな夢か？」将来の自分の姿を思い描かせることです。②「夢を具体的に」描くことは、ただ単に大学進学や企業入社が目標ではないはずであり、進学希望であっても仕事や職業を調べることが大切になります。③「夢を実現するために」将来就きたい仕事や職業を決めるにあたってその道筋を具体的に考えさせます。そのためには高校卒業で十分か、大学に進学か、専門学校に進学か、何を勉強すればよいのか、専門資格が必要ななどの視点が大切です。さらに、卒業した先輩の話や資料も参考になります。また、家族と相談し、家庭の事情から実現可能なかどうか考えさせます。



進路実現のために目標を立て、今できることをしっかり学習し、道を開かせます。

#### 4 入学時の生徒指導！

入学時における生徒指導は、極めて大切なことです。中学校生活からの脱皮と高校生活への適応を学校の組織を挙げて意識的に説明し、理解を促します。そのポイントは、①日々の教育活動を通し、「社会の一員としてよりよい生活を

するために具体的な指導」を行う。②生徒指導の方針や目標を明確にして、「保護者からの協力や連携を得て積極的な指導」を行う。③生徒の実態、地域の実情、社会の常識、社会の進展等を踏まえ、「生徒に校則遵守の指導」を行う。の3点です。

生徒の発達段階に応じて生徒の内面的な自覚を促し、自主的にきまりを守る指導や違反した場合であっても、問題の背景にあるものを配慮し、真に教育的効果も視野に入れて指導を行います。生徒指導の具体例を挙げると、

- ・喫煙（県内の各高校で指導件数が多い）
  - ・携帯電話（マナーを守りながら使えない）
  - ・交通違反（4プラス1ない運動に違反）
  - ・性問題（節度ある男女交際ができない）
  - ・その他（万引き、いじめ、飲酒等の問題）
- 等の問題行動です。そして、「いつまでに、何を、どうするか」を明確に教師が意識することで、生徒指導への取組みが向上します。

#### 5 おわりに

導入指導等を一通り終えた今の時期は、PDC Aで言えば、CAの段階かと思います。ぜひ、今年度の取組みについて十分チェックし、次年度に向けてのアクションを考えてみてください。

そして、次の進路指導なりの場面においても、PDCAを生かした実践を行っていくことで活力あるよりよい高等学校生活が形づくられると思います。

新入生が新しい学校生活の第一歩をスタートする上で組織マネジメントの発想が大切になります。「明確な指導目標の設定」、「PDCAサイクルに基づく、組織的な導入期指導」、「Aをさらに実効あるものにするための検証」を行ってください。

新入生が夢や希望を実現するためにも、不安な学校生活を応援するためにも「新入生の導入期指導を組織マネジメント」で生かすことが望まれます。

教育相談チーム

機能していますか？

## 校内の特別支援教育体制

～特別支援教育コーディネーターの役割と活動～

県内の各学校では「特別支援教育コーディネーター」の指名、「校内支援委員会」の設置と校務分掌への位置付けが100%整えられました。しかし、形としては整っても実際の活動としては今一步踏み出せていないというのが実情ではないでしょうか。特別支援教育のための校内支援体制については、学校規模やスクールカウンセラー配置の有無、教員の特別支援教育に関する認識の程度等を考慮し、各学校の実態に合うシステムを構築することが大切です。全職員が互いに学級を開き合い、協力してシステムを機能できるようにすることがポイントです。今回は、校内支援委員会を活性化させるために、特別支援教育コーディネーター（以下コーディネーター）が果たす役割や活動について紹介します。

### 〈事例〉 大声で泣きわめく裕太君

A小学校は、不登校気味の子どもはいるものの、比較的落ち着いた学校です。A小学校でも校内支援委員会が昨年度から新規に立ち上げられ、養護教諭の五月田先生がコーディネーターの指名を受けました。五月田先生は、昨年度も何人かの児童が気になってはいましたが、外の仕事が忙しくコーディネーターらしい役割を十分に果たすことができませんでした。

そこで、五月田先生は、今年度は計画的に校内支援委員会を開催し、機能できる校内の体制を整えたいと考え、気になる児童の実態調査を担当の先生にお願いしてみました。調査結果の中には、五月田先生も気になっていた児童の名前がありました。2年生の裕太君です。裕太君は、今年赴任した大木先生(38歳男性)のクラスの児童です。

ある日、五月田先生は、運動会の練習中、大声で泣きわめいている裕太君に気が付きま

した。すぐそばには大木先生がついています。裕太君の様子をもっとよく知りたいと思った五月田先生は、二人のやりとりの様子をしばらく見守ることにしました。

裕太 こんなのやりたくない!

大木先生 どうしてやりたくないの?

裕太 ぼく、一番になれない!

大木先生 一番になれなかったって、一生懸命がんばることが大切なんだよ。

裕太 一番じゃないとやだ!

大木先生がいろいろなだめたり、言い聞かせたりしても、裕太君の声はどんどん大きくなるばかりでした。



### 第1回校内支援委員会までの働きかけ

五月田先生は、その後、大木先生にさりげなく話しかけてみました。

五月田先生 最近、裕太君の泣き声がよく聞こえますが、裕太君はどんな時に泣くんですか？

大木先生 今日のように一番になれない時や何か新しいことをやらせようとする時によく大泣きするんです。

大木先生は、困った顔をして話し始めました。詳しく聞いてみると、どうも友達との遊びも苦手で、自分の思いが通らない時等に大声で泣きわめくということが分かりました。

この話を聞き、五月田先生は、学年主任の相馬先生、生徒指導主事の細木先生、教頭先生にも裕太君について話を聞いてみました。

細木先生 もっと厳しく指導すべきですよ。  
相馬先生 でも、厳しく叱ってもぜんぜん効果目はないし、それどころかますます大声で泣くんですよ。学年の活動でも本当によく泣きます。

教頭先生 大木先生、裕太君の指導で頭を痛めていますよね。一人では参ってしまいかもしれないな。

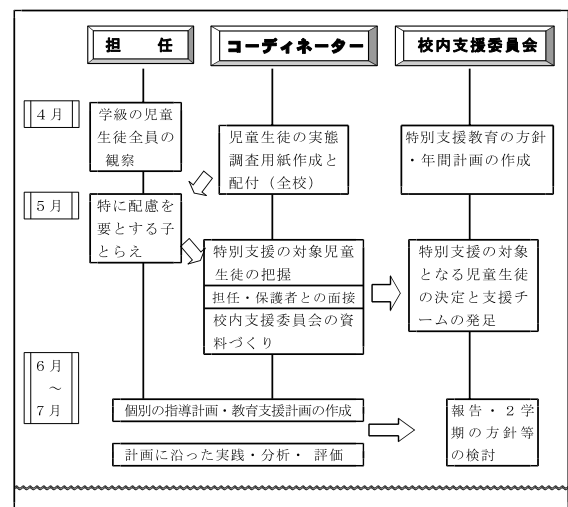
五月田先生 それでは、裕太君の指導援助について校内支援委員会で話し合っていていただいでよろしいでしょうか？

教頭先生 そうですね。具体的に何ができるかみんなで考えてみましょう。

### 第1回校内支援委員会

こうして、今年度第1回目の校内支援委員会が開催されました。コーディネーターである五月田先生が進行を務め、今年の校内支援委員会の年間計画についての協議と、今すぐ校内で支援体制をとってかわらなければならない児童についての話し合いを行いました。その席で五月田先生は、コーディネーターや校内支援委員会の役割、そして、担任との関連が一目で分かる、図

のような年間計画を提案してみました。漠然としていた特別支援教育についての校内体制を全職員に分かってもらい、みんなで年間の流れを確認し合うことで校内支援委員会がより機能しやすくなると考えたからです。先生方からは「昨年は、校内支援委員会ってどんな組織なのかよく分からなかったし、何をする委員会なのか分からなかったけど、この図は分かりやすい」とか「担任もいつごろどんなことをするのか分かった。」という声が聞かれました。



また、裕太君の指導援助については、担任一人で支援することが難しい児童であるので、しばらくの間、次のように場面ごとの三つの支援体制を取ってみることになりました。

- ① 教室の中での本人の好きな教科の授業では**担任の個別支援**を行う。
- ② 屋外での活動・作業を伴う授業や学年・学校行事等の時は、授業のない先生（生徒指導主事、教務主任、教頭、養護教諭等）が**複数で支援する**。
- ③ 算数等、毎日の学習の積み重ねがないと次に進めない教科や個別指導が必要な時間は、教頭先生や校長先生等が**別教室で支援する**。

また、五月田先生は、指導に当たる先生方に指導改善に役立つような「自己評価付き実践記録用紙<sup>\*1</sup>」を配付し、次回に持ち寄ってもらうことにしました。

大木先生からは、「今まで一人でどう指導していいかわからないで困っていたので、気持ちが軽くなりました。」と、感謝の気持ちが述べられました。

## 第2回の校内支援委員会

1か月後、第2回の校内支援委員会が開かれ、どんな成果があったのか、今後の課題は何か等について、話し合いが持たれました。

五月田先生 算数等別室での裕太君の様子はいかがですか？

教頭先生 静かな環境だと、落ち着いて学習できるようです。しかし、すいすい解いているようで、よく見ると数字を読み違えている時もあります。もう少し個別に指導しながら様子を見る必要があると思います。

教頭先生からは、裕太君については軽度発達障がいの可能性も考慮した対応も必要であるという話があり、校内だけでの対応が不十分な場合には、専門家や関係機関・医療機関と連携を図っていくこと、保護者と連携したチーム支援体制づくりを進めていくことを確認しました。

## 機能し始めた校内の支援体制

こうして、第3回、第4回と校内支援委員会が定期的に、また必要に応じて随時持たれるようになった結果、校内の支援体制が少しずつ機能していきました。さらに、校内での研修会へも先生方が積極的な姿勢で参加してくれるようになり、特別支援教育についての理解も深まりました。他の児童にも積極的にかかわる先生が増え、担任への支援も充実し、学校全体の雰囲気、教職員全員で一人一人の児童をきめ細かに見ていこうという姿勢に変わっていきました。

### 〈特別支援教育コーディネーターの役割と活動〉

校内支援委員会の活動をリードしていくコーディネーターが、その役割をどう果たしていけ

ばよいのか、次の7点にまとめました。第一段階であるステップ1と2のイメージはこれまでに述べましたので、第二段階のステップ3と4、第三段階のステップ5～7について以下を参考にしてください。

### 〈第一段階〉

#### ○ ステップ1

支えるべき児童生徒、特別な教育的ニーズのある児童生徒の実態調査を行う。

#### ○ ステップ2

自校の組織に応じた支援体制を具体化し、提案する。

### 〈第二段階〉

#### ○ ステップ3

教員の特別支援教育に関する知見を広げるために研修を行う。

年に何回か教員の知見を広げるための研修の機会を設定し、軽度発達障がいについての話や事例研究等を通して、具体的な指導や支援策について学ぶことができるようにします。

#### ○ ステップ4

保護者や関係機関等から得られた情報を共有できるようにする。

専門家（巡回相談員等）と連携する必要性を確認し、実態に応じた依頼をします。例えば来校していただき、授業参観による実態把握をお願いしたり、校内支援委員会等で具体的な支援についての助言を仰いだりします。

### 〈第三段階〉

#### ○ ステップ5

保護者や関係機関と連携して個別の教育支援計画を作成する。

目の前の指導をどうするかという指導計画と同時に、長期的展望に立った個別の教育支援計画を作成していくことが支援の方向を見据える上で重要です。個別の教育支援計画の作成により、関係者全員の協力支援体制がお互いの理解の下で整えられ、成果が得られやすくなります。

作成する際には、保護者や関係機関と連携を図っていくために、次のような内容が必要です。

- ① 長期的目標や保護者の願いを把握し、教科等の学習形態やその他の学校生活における手立て、その時の支援内容・引き継ぎ事項等を記録した「個別の支援カード」<sup>\*2</sup>を作成します。
- ② 本人理解と適切な指導援助のため、生育歴や家庭環境、医療機関での診断結果や社会生活能力等専門的な検査結果も記入できる個人の「プロフィール用紙」<sup>\*3</sup>も作成しておきます。  
コーディネーターと学級担任、保護者との話し合いの場を設け、支援についてより具体的な目標や指導の方針を練り上げ、個別の教育支援計画を作成します。

#### ○ ステップ6

個別の教育支援計画や教育課程等を踏まえて、個別の指導計画を作成する。

ステップ5を受け、学校や家庭それぞれに必要な配慮点と、次の内容等を盛り込んだ個別の指導計画を作成します。

- ① 短期・長期目標（学校と家庭それぞれ）
- ② 実態（学習面・行動面・社会性・健康面）
- ③ 指導の目標や手立て
- ④ 中間評価（指導者の自己評価）
- ⑤ 今後の方針等

#### ○ ステップ7

支援内容や方法を評価し、個別の教育支援計画や指導計画を見直す。

適切な支援がなされているかについて、専門家の指導を参考にしながら定期的に校内支援委員会で協議し、計画の修正を行います。見直しの視点として、次の内容等が考えられます。

- ① 優先課題・短期（長期）目標は妥当か
- ② 学習内容は適切であったか
- ③ 授業形態・指導形態は適切であったか
- ④ 指導体制は適切であったか 等

協議の結果を受け、必要に応じて今後の方針を立て直します。

#### 〈おわりに〉

本県でも平成17年2月に県内全公立小・中学校を対象に「特別な教育的支援を必要とする児童生徒の調査」が実施されましたが、全体平均で4.0%（小4.8%、中2.6%）それらの児童生徒がいることが報告されています。その主な様子としては、集中力がない、グループ活動ができない、衝動的である、思いどおりにならないと興奮する、という状態が挙げられています。

また、指導上の課題としては、正しい理解と指導のための校内体制が不十分である、個別の指導計画が必要である、教員数が足りなく個別的な対応には限界がある、教師間の連携が不十分であるなどの点が挙げられています。

調査結果からも、特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、おそらくどの学校にもいるのではないかと考えられます。そのため、校内の支援体制を機能させ、子どもたちへより適切な対応をしていくことが急務となっています。すべての子どもたちが、生き生きと楽しく充実した学校生活を送れるよう、アイデアを出し合って支援していきたいものです。

#### （参考文献）

- ・特別支援教育の校内支援体制づくり 大南英明編 図書文化（\*1・2・3について示されています）
- ・学習障害(LD)への教育支援 文部科学省著 ぎょうせい他

## 自然の姿に迫る ～理科研修講座～

子どもたちが更に理科が好きで得意になり、自然科学的なものの見方や考え方を伸長させるためには、それぞれの学年に応じて、本当の自然を実際に見て、正しい知識と認識を獲得させる必要があります。そこで、当センターの理科に関する研修講座では、観察、実習、実験を重視し、学校の授業や部活動、その他の活動等においても実際に利用できる研修を設けています。

ここでは、今年度実施した「小学校理科講座・現地研（県中会場）」の概要と受講者の感想及び昨年度実施した「高等学校理科実習実技講座」の概要と受講者の感想、更に今年度実施する「高等学校理科実習実技講座」の内容と「親子サイエンス教室」の概要を例に講座の様子を紹介します。

### 平成18年度「小学校理科講座・現地研（県中会場）」の概要

今年度は、5月26日（金）に三春町さくら湖自然観察ステーションで実施しました。

A区分（生物分野）では「身近な植物」として野外観察を通して検索表と図鑑を用いて身近な植物の検索について研修し、植物観察園の草花の名前を調べました。B区分（物理・化学分野）では実験を通して実験指導のポイントについて学びました。「水溶液の働き」では、紫キャベツの煮出し汁で酸性とアルカリ性の強さを調べる方法について研修しました。「ものの運動」では、振り子の長さや周期について量的な関係まで調べました。「空気のあたたまり方」では、ミニチュアの熱気球で上昇する空気を捕らえて対流現象を実感しました。C区分（地学分野）では、「大地の観察」として野外で露頭の観察と岩石採取をした後、室内で岩石の風化作用や地球内部の構造等について講演を聴きました。

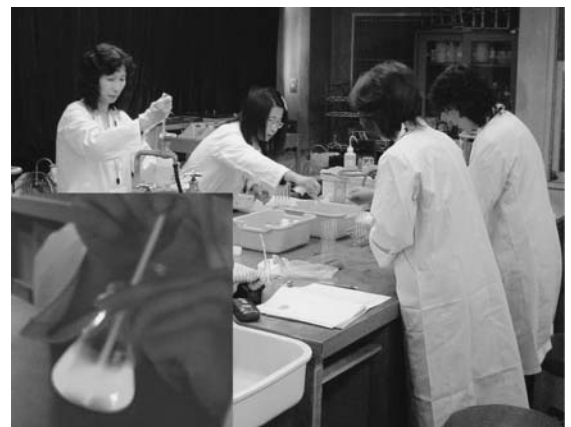


### 受講者の感想

「身近な植物に触れ、名前や特徴などを調べる方法が身に付いた。」「土も石も水と同じように地球を巡っているということに驚いた。この気持ちを子どもにも伝えたい。」「振り子の実験での謎が解けて良かった。」「見えないものを実験を通して理解させる工夫を学べて良かった。」「問題意識の持たせ方や実験における留意点が明確に伝わり良かった。」

### 平成17年度「高等学校理科実習実技講座」の概要

昨年度は、10月24日（月）、25日（火）の2日間にわたり実施しました。



物理分野では、身近な材料を用いてラジオの受信機を作製し共振回路について研修しました。化学分野では、コロイドの性質とルミノール反応を通してエネルギー状態について学びました。生物分野では、野鳥の森で鳥類の観察をしながら晩秋の鳥を分類しました。地学分野では、福島の子どもの夢をはぐくむ施設「こむこむ」でプラネタリウムを観覧し星の動きについて学んだ後、望遠鏡の操作について研修しました。



#### 受講者の感想

「ラジオの声が聞こえたときは感動しました。」  
「金星観察もいい経験をさせてもらいました。星を見るのが楽しみになりました。」  
「コロイドの実験が新鮮だった。学校でも家でもやってみたい。」  
「実験を通して身近な現象がよく理解できた。」  
「新しい試みを見るたびに自然に対する興味が深まり、学校に戻って自分も生徒に何かを与えていきたいと思います。」  
「中学生向けの体験入学でも活用してみたいです。」

#### 平成18年度「高等学校理科実習実技講座」の内容

今年度は、昨年と時期を変え季節によらない内容で実施します。

物理分野では、「放射線の測定」をテーマとして、放射線測定協会から借用した放射線測定器「はかるくんⅡ」を用いてバックグランド放射線や空気中の放射線を測定し、放射線の性質を知ることによって生活環境への関心を高めます。化学分野では、「食品に含まれるビタミンCの定量」をテーマとして、試薬を調合して、レモン汁などに含まれるビタミンCの濃度を滴定により求

め、ビタミンCの性質を知るとともに、食べ合わせについても発展させます。生物分野では、「簡易比濁計の作成と酵素反応の測定」をテーマとして、自作した比濁計を用いてデンプンとタンパク質の酵素による分解の様子を定量的に測定し、唾液などに含まれる酵素の性質について研修します。地学分野では、「岩石薄片の作成」をテーマとして岩石薄片を作成し、偏光顕微鏡で観察することで自然の妙技を実感しながら岩石の特徴と鉱物の特徴を調べます。

当センターでは、小学校理科講座と高等学校理科実習実技講座のほかにも中学校理科講座と高等学校理科講座、更に大学と連携して実施するSPP教員研修を開催しています。講座を通して一緒に自然の姿に迫ってみませんか。

#### 「親子サイエンス教室」の概要

教員対象の研修講座以外にも、一般を対象として夏休みに「親子サイエンス教室」を実施しています。4年目を迎えましたが、例年希望者が多くやむを得ず抽選によって参加者を決定していました。今年度は多くの方々が参加できるように1日で実施できる内容に変え、8月5日と6日に開催します。物作りをしたり電子顕微鏡で植物や鉱物を観察したり、 $-196^{\circ}\text{C}$ の世界を体験したりするなど楽しい実験・観察を予定しています。



「窓」をご覧になった皆様にも、様々な機会をとらえて、お子様とともに自然の姿に迫る時間を持つことをお勧めいたします。



# 指導主事の個人研究から

教育センターでは、チーム研究のほか、指導主事がテーマをもって個人研究を行っています。今回は、平成17年度の個人研究の概要を紹介します。研究の詳細については、教育センターWebのカリキュラムセンター実践事例集に掲載しておりますのでご覧ください。

## 【高等学校 美術】

### 3 DCGによる動画制作の研究

教科教育チーム 指導主事 片平 仁

アニメーションを伴う3DCGによる作品を制作するために必要な事項について、基礎的な研究を行った。次に作品を制作し、制作の過程で明らかになる様々な事項について記述した。その後、それらを精査し重要な事項を拾い上げた。それらは、3DCGの授業を組んで行く場合に有益な道標となると思われる。以下は、その中で特に重要と思われる事項である。

- 1 2DCGのソフトウェアと3Dモデリングの習得がレディネスとなる。
- 2 イメージを絵コンテ等の形式で正確にまとめさせる作業が必要である。
- 3 画像フォーマットに関する正確な知識が必要である。
- 4 制作するオブジェクトは、ディテールにこだわらない造りで表面材質もシンプルなものが望ましい。レンダリングに必要な時間を短縮するためである。同様にライト、背景等のセッティングも必要最小限であることが望ましい。
- 5 使用する動画ソフトは、オブジェクトの大きさや位置が数値でコントロール可能なものが望ましい。
- 6 アニメーションをつける上では、自分なりのルールを考えさせる必要がある。CGではどのような変形も移動も可能であるため、自己設定ルールの下で意味付けしていかないと、訴求力ある作品として仕上げることは難しい。

## 【高等学校 家庭】

### 高等学校におけるテーブルコーディネートの指導の在り方

教科教育チーム 指導主事 黒川 佳子

指導法の研究や実践例等が乏しい高等学校専門科目「フードデザイン」の新内容、「テーブルコーディネート」の指導の在り方の研究を行った。

#### 1 高等学校における指導の考え方

食事の文化的・精神的な意義を考え、食事を総合的にデザインする能力と態度を育てるためには、食卓構成、食卓作法、調理実習、テーブルコーディネート、会食を組み合わせた題材を構成し、指導していくことが有効ではないかと考えた。

#### 2 高等学校における授業実践

上記の考えから、テーブルコーディネートを盛り込んだ「クリスマスの食卓」「ひなまつりの食卓」「日常食」の三つの題材を構成し、授業を実践した。実践後には、食事を準備する時に、見た目や精神的な満足等を重視するようになるなど、食事に対する意識の広がりが確認された。また、テーブルコーディネートを通して、生徒が自らの考えを表現しようとする高い意欲が見られた。

#### 3 研究の成果と課題

題材構成によるテーブルコーディネートの指導が実践可能で、食事を総合的に考える意識の育成に有効であることは検証できた。しかし、食事を総合的にデザインする確かな実践力を育成するためには、長期的な計画を立て、指導していくことが必要である。

## 平成18年度の研究主題が決まりました

### 児童生徒の「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」をはぐくむために

～平成18年度 長期研究員の研究内容を紹介します～

芳賀沼 彰 (中学校 英語)

今、求められている「読解力」とは何か？生徒が「英語を使える」ようになるためには一体何が必要なのか？今までの授業で培ってきた「コミュニケーション能力」を支える基礎・基本の確実な定着はもちろん、「考える」ことも大切にしたい授業を研究します。

鈴木 純子 (小学校 道徳)

「心の教育」が求められる今、道徳の学習について、「道徳的価値の自覚」「子どもの発達段階」「道徳的価値の発展性」の三つの言葉をキーワードに、6年間を見通した、発展性のある道徳の学習の在り方について研究を進めます。

橘 健一 (中学校 保健体育)

体力の向上は早急に対応策を講じていかななくてはならない問題です。今回、体育の授業において体づくり運動を導入時に、継続的に行うことにより、生徒の体力を高めるための授業の改善を図る研究をします。

阿部 智彦 (小学校 理科)

生きてはたらく「科学的な思考力」を育成するために、知識や技能を定着させ、意味付けたり、関係付けたりする学習活動に着目。観察、実験の事象提示や学び合う活動の工夫を通して、児童が、意欲的に知識や技能を活用・表現できる学習活動の研究をします。

森谷 平二 (情報モラル)

情報モラルの育成は急務とされています。生徒に対する具体的なケーススタディを通して、法的局面からの指導を徹底することにより、情報に係る児童生徒事故の未然防止及び被害の最小化が図られるものと考え、情報モラルの指導について研究を進めます。

古川 雅弘 (小学校 教育相談)

子どもたちは、学級に温かい触れ合いを求めています。しかし、なかなか思いどおりにいかないのが人間関係。「あたたかいふれあいのある学級」をつくるには、具体的にどう支援していったらよいのかを研究します。

齋藤 園子 (小学校 国語)

国語科で身に付けさせなければならない読解力とは…今、改めて問い直しが迫られています。PISA型「読解力」を視野に入れながら、今までの説明文の授業のどこを工夫・改善していけばよいのかを明らかにします。

古田 孝信 (小学校 算数)

「数学的な考え方」を伸ばすためには、どのような支援や算数的活動が有効なのか。また、一人一人の子どもが、意欲的に算数の学習に取り組むための発展・補充的な学習の在り方はどうあればよいか等について研究を進めます。

高橋 崇 (学校評価)

小学校における『学校経営・運営ビジョン』実現のための取組みを、目標の連鎖と協働による実践という視点からとらえ、学校組織の実態を明らかにします。そのことにより、学校の組織力向上を図るための課題と手がかりを見い出していきます。

佐藤 克敏 (教育相談)

「生きる力を育てる授業実践プログラム」が校種別に既に開発されています。今年度は、高等学校における学校教育相談活動及び学校教育相談体制の現状と課題を把握しながら、更なる予防的・開発的教育相談推進の一助となる研究を進めます。



昨年7月にオープンしましたカリキュラムセンターは、開設2年目を迎えました。先生方のニーズに応じた活用の輪が県内全域に広がりつつあります。日々の教育実践のお役に立てるように、気軽に利用できるカリキュラムセンターを目指して、これからも取組みを進めていきます。たくさんのご利用をお待ちしております。

**Q1 カリキュラムセンターの役割は何ですか？**

カリキュラムセンターは、県内の先生方や学校が日常の教育活動でお困りのことについて、相談や様々な支援を行っている教育センターの新たな窓口です。

カリキュラムセンターでは、県内の先生方や各学校、市町村教育委員会をはじめとする教育機関等を対象として、教育活動全般について研究成果や資料・情報等を提供するとともに、相談をお受けして指導や支援等の援助を行っています。

**Q2 カリキュラムセンターには先生方からどのような声が寄せられていますか？**

カリキュラムセンターには、先生方や学校からのたくさんの相談や依頼が寄せられています。その一部をご紹介します。

- 校内授業研究会で継続して指導いただける指導助言者を紹介ください。
- 地区の研究会で講話をいただく教科担当の指導主事を派遣して欲しいのですが。
- 同じ単元での授業実践事例があれば参考にしたいので紹介ください。
- 授業で提示する資料づくりのために、このような資料をさがしているのですが。
- 授業を構想する段階で悩んでいます。相談にのってもらえるのでしょうか。

**Q3 カリキュラムセンターではどんなことが可能ですか？**

- ① 相談することができます～コンサルタントに関すること～
  - 学校経営、学習指導、その他教育活動に関する「何でも相談」を受けます。
  - 学校や各教育関係団体からの講師派遣の要請を受けます。
- ② 研究の支援を要請できます～調査・研究・開発に関すること～
  - 学校等の要請に応じて教育研究を支援します。
  - 調査研究の実践的有効性の検証を支援します。
- ③ 調べることができます～教育情報・資料の収集と提供に関すること～
  - 図書資料や教育課題に関する各種資料を提供します。
  - 優れた授業実践の資料を提供します。
- ④ 学校と教育関係機関をつなぎます～ネットワークの構築に関すること～
  - 講師人材の必要な情報を提供します。
  - 各種研究機関と学校等のネットワークづくりを進めます。



**Q4 利用するにはどうしたらいいのですか？**

「こんなことが知りたい。」「こんなことがしたい。」というご要望を、まずはカリキュラムセンターにお気軽にお寄せください。すぐに対応いたします。

Tel : 024-553-3141 (内線33)

Fax : 024-554-1588

E-mail : curriculumcenter@center.fks.ed.jp



# 情報モラルの授業を気軽に始めましょう！

## 1 はじめてでも大丈夫!!

「ロールプレイを取り入れて、表情が見えるときと見えないときの伝わり方の違いを体験させましょう。」

研修会場いっばいに、参加された先生方のアイデアが飛び交っています。その光景を見て、講座担当者が思わず口に出した言葉が、



南会津地区の様子

「先生方って、モラルの授業を作るのって初めてじゃなかったの!？」

これは「情報モラルの理解と指導講座」の演習の様子です。参加した先生の多くは、情報モラルの指導案を作るのが初めてにもかかわらず、今までの授業実践で培ってきた力を指導案にどんどん生かしていく姿が見られました。

## 2 授業実践をサポートしています!!

今年の5月に実施した「福島県の情報教育の実態等に関する調査」では、ほとんどの学校が、「今年度、情報モラルを指導計画に組み込んでいる」と答え望ましい結果が出ました（調査結果は、後日、Web等で公開）。

各学校で情報モラルを実践しようという気運が高まる中、福島県教育センターでは、先生方の授業実践を支援することを目標に、「情報モラルの理解と指導講座」を実施いたしました。ここでは、実際に行われた講座の様子を紹介しながら、初めてでもできる「情報モラルの授業実践研修」について説明いたします。

## 3 講座の様子を紹介します!!

「情報モラルの理解と指導講座」は、大きく分けて「講義：情報モラルの現状」と「指導案作成演習」の二つの内容で構成しています。

### (1) 「情報モラルの現状」について

ここでは、現在問題になっている自殺サイト、フィッシング詐欺、学校別掲示板、ブログ等の現状を説明しました。参加した先生



の多くは、学校別掲示板での誹謗中傷が、児童生徒だけでなく教師にまで及んでいることを知

り、驚きを隠せない様子でした。

今回、使用したパワーポイントのデータは、教育センターのWebページからダウンロードできるようになっています。ぜひご活用ください。

### (2) 指導案作成演習について

今回の講座のメインテーマです。途中まで作られた指導案を基に、小人数グループで話し合いながら完成させる作業を行いました。扱った題材は、「携帯電話メールによる言葉の行き違い」「肖像権」「ブログ」「携帯電話のトラブル」「電子メールのトラブル」の計5例。参考資料として、実践事例集、指導案作成のポイント、指導案の完成版、スライド教材、ワークシート等を準備しました。参考資料を活用しながら指導案を完成させることで、情報モラルの授業を組み立てることができるようになります。

## 4 みなさんも始めてみませんか!!

講座で作成した指導案を基に実践された先生の話や、聞くと、「思っていた以上に簡単に実践することができた。」「もっと早く取り組んでいれば、メールのトラブルが防げたかもしれない。」という声が聞かれました。情報モラルの授業は、児童生徒が情報社会を生きるために必要不可欠なものです。参加された先生方を中心に、校内研修を開いたり、今回使った資料を配布したりすることで、多くの先生方に授業実践をして頂きたいと願っています。

学習活動	指導上の留意点
<p>携帯電話のメールで読解された事例を知り、本時のあてを把握する。</p> <p>事例の生活の中で、うまく気持ちが変わらなから指導案を組む。</p> <p>Q: SNSが普及したメールの読解が難しくなってきたと感じ、悩むことを発表する。</p> <p>Q: 友だちが読解された理由を尋ねる。</p> <p>Q: 本時のあてを把握する。</p> <p>※ 指導案作成時の留意点について話し合おう。</p> <p>グループごとに、メールを出すときに気をつけることを話し合おう。</p>	<p>Q: 知らないうちに授業を進めるための「あて」を提示して欲しい。</p> <p>Q: 読解する事例は、実際にあったトラブル事例にしたい。</p> <p>Q: 本時のあては、授業の目的を達成するために必要なことか。</p> <p>Q: 読解された理由を尋ねるための「あて」を提示して欲しい。</p> <p>Q: 読解された理由を尋ねるための「あて」を提示して欲しい。</p> <p>Q: 読解された理由を尋ねるための「あて」を提示して欲しい。</p>

## 5 最後に

情報モラルの指導に関して、分からないことや不安に感じるがありましたら、情報教育チームにいつでも相談してください。

※カリキュラムセンターでは、情報モラル校内研修のサポートもいたします。

電話：024-553-3141 (内線68)

メール：joho@center.fks.ed.jp

— おしらせ —

著名な講師による

## 「講義(講演)を聴講してみませんか！」

(夏休み中の講座 一部紹介)

— [ 学校教育相談基礎講座 ] —

### 「発達心理学と問題行動」

児童生徒は、自分の置かれている状況の中で抱え込まざるを得ない「問題」を、不登校や非行、いじめ、自傷行為等の「行動」として表出します。私達は、日々、児童生徒の様々な問題行動に対応していますが、より適切な指導援助を進める上で欠かせないのが、「行動」の背景にある本人の「課題」を把握することです。児童生徒への指導援助の在り方を、発達段階と発達課題の視点から考え、学校でできる具体的ななかかわりについて考えます。

8月1日(火) 13:00~15:00

福島県立医科大学 助手 山本 佳子

8月3日(木) 13:00~15:00

福島学院大学 臨床心理士 佐藤 佑貴

— [ 特別活動実践講座 ] —

### 「生きる力をはぐくむ特別活動」

「生きる力の育成」に向けて、特別活動の果たす役割は大きく、各学校においてはその達成に向けて様々な実践がなされていることと思います。さて今回、特別活動の第一人者である、お二人の講師をお招きし、特別活動の理念を始め、実践上の課題、そして全国で最も進んだ実践例を交えた貴重なお話を直接、伺う機会を設けました。これまでの自分を振り返るよい機会ととらえ、「生き生き学級・学校づくり」を目指して聴講してみたいはいかがでしょうか。

8月1日(火) 13:00~15:00

(小学校対象)

文部科学省 教科調査官 すぎた 杉田 ひろし 洋

8月4日(金) 13:00~15:00

(中学校対象)

東京学芸大学 助教授 はやし 林 まさみ 尚示

※ 対象が明記されておりますが、校種を問わず聴講していただいて結構です。

各種研修の中で行われる外部講師による講義や講演の聴講ができます。

今年度は、**71講座を開設**しました。

教育センター所定の用紙で1週間前までに申し込んでください。

詳しくは、教育センターのWebページをご覧ください。

お問い合わせ先 TEL 024-553-3141 内線33

<http://www.center.fks.ed.jp/>

## **速報** 平成18年度福島県教育研究発表会

今年度の福島県教育研究発表大会の日程、会場が決まりました。今年度は「発表」と「意見交流」に時間をとり、ゆとりを持った発表会にしたいと考えております。先生方のたくさんの参加をお待ちしております。なお、詳細は次号でもお知らせいたします。

◎期日／平成19年1月26日(金) ◎会場／須賀川市文化センター・須賀川アリーナ

## 実践に役立つ教育資料

### —最近の研究紀要・資料から—

平成17年度末から平成18年度初めにかけて受け入れた研究紀要や教育資料から、実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

#### 学校評価システムの構築に関する開発的研究 中間報告書(2)

国立教育政策研究所(2006年3月)

イギリスやニュージーランド、ドイツ等における外部評価の実態、並びに外部評価実施に伴い必要とされる諸施策(評価結果の反映、学校改善支援システムの構築、評価者の養成等)の特質・構造・機能の分析を行い、日本に導入可能な学校評価システム構築の方策を明らかにしています。

#### 「キャリア教育」資料集

##### —文部科学省・国立教育政策研究所—研究・報告書・手引編

国立教育政策研究所(2006年3月)

「キャリア教育」をめぐる動向にかんがみ、文部科学省・国立教育政策研究所等において、これまでに出された関連する主な研究報告書・手引・資料等を整理し、「キャリア教育」資料集として取りまとめたものです。

#### 学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究

##### —「知を活用する力」の視点を利用して学習意欲を喚起する—

国立教育政策研究所(2006年3月)

「ホリスティック」な視点で、学習内容(部分)と日常現実社会(全体)とのつながりをつけた教材・単元開発を行い、児童生徒の学習意欲を喚起し、実感的な理解を図ろうとしています。また、この研究は、学習指導要領の改訂に先駆けた、知識・技能を実生活に活用する教材・単元開発にもなっています。

#### 通常の学級に在籍する軽度発達障害の子どもたちへの学習支援の在り方

##### —国語科と算数・数学科の実践を通して—

秋田県総合教育センター(2006年3月)

教師へのアンケート調査を通して、子どもたちのつまずきの実態や教師の悩みを把握し、支援の視点や手立てが提案してあります。また、事例を通して子どもたちのつまずきに対しての有効な支援方法を探り、具体的な学習支援の在り方についてその視点や情報を提供するとともに、通常学級で支援を進めていく上での課題を明らかにしています。

※ 今後も、実践に役立つ教育資料を紹介してまいります。